

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第148集

# 岩崎城西遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 岩崎城西遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道関連遺跡発掘調査

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にもなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成元年度に発掘調査した岩崎城西遺跡の調査結果をまとめたものであります。岩崎城西遺跡は、和賀川右岸の夏油川によって形成された扇状地末端部に立地し、調査の結果、戦国時代の防禦施設と推定される溝や柱穴列等の遺構と縄文・弥生時代から中近世までの遺物が発見されるなど、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、新学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、和賀町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成2年5月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 中村 直

## 例 言

- 1 本報告書は、岩手県和賀郡和賀町岩崎第19地割4-1ほかに所在する岩崎城西遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、東北横断自動車道秋田線建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号および遺跡調査略号は次のとおりである。  
遺跡番号 ME64-2138 遺跡調査略号 ISJ-89
- 4 調査面積は5,550㎡である。野外調査は平成元年4月10日から7月15日まで実施し、調査資料の整理作業は平成元年11月20日から平成2年1月27日まで実施した。
- 5 発掘調査は中村良一・川村均が担当し、室内整理および報告書の作成は中村良一が担当した。
- 6 各種鑑定等に当たっては、下記の方々に依頼した。  
石材鑑定 佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）  
炭化材の樹種鑑定 早坂松次郎氏（岩手県木炭協会）
- 7 野外調査に当たっては、和賀町教育委員会および地元の方々の御協力をいただいた。
- 8 本遺跡から出土した遺跡および調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目次

## 本文目次

序	
例言	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 位置	1
2 地理的環境	3
3 地形	3
4 基本層序	5
5 周辺の遺跡	5
III 調査方法と室内整理の方法	10
1 野外調査	10
2 室内整理	11
IV 検出された遺構と出土遺物	17
1 遺構と遺構内出土遺物	17
2 遺構外の出土遺物	27
V まとめ	60
1 遺構	60
2 遺物	61

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	9	第3表 石器・石製品一覧表	58
第2表 石器・石製品一覧表	57	第4表 石器・石製品一覧表	59

## 図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第7図 III B05遺構	19
第2図 地形分類図	4	第8図 III J04-1・2柱穴列	21
第3図 土層柱状図	5	第9図 柱穴状小土坑	22
第4図 周辺の遺跡位置図	7	第10図 IV D16溝跡	23
第5図 調査周辺地形図	13	第11図 IV D11炭窯跡・I F15焼土	25
第6図 岩崎城西遺跡遺構配置図	15	第12図 III B05溝跡出土遺物	26

第13図	第Ⅰ群土器	31
第14図	第Ⅰ群土器・第Ⅱ群土器	32
第15図	第Ⅲ群土器	33
第16図	第Ⅲ群土器・第Ⅳ群土器	34
第17図	第Ⅳ群土器	35
第18図	第Ⅴ群土器	36
第19図	第Ⅴ群土器	37
第20図	石器(1)	41
第21図	石器(2)	42
第22図	石器(3)	43
第23図	石器(4)	44
第24図	石器(5)	45

第25図	石器(6)	46
第26図	石器(7)	47
第27図	石器(8)	48
第28図	石器(9)	49
第29図	石器(10)	50
第30図	石器(11)・石製品	51
第31図	砥石(1)	53
第32図	砥石(2)	54
第33図	砥石(3)	55
第34図	砥石(4)・石製品・土師器・ 須恵器・陶器・金属製品	56
第35図	Ⅲ B05溝跡と周辺の遺構	60

## 写真図 版目次

写真図版 1	遺跡航空写真等	65
写真図版 2	基本土層・遺構(1)	66
写真図版 3	遺構(2)	67
写真図版 4	遺構(3)	68
写真図版 5	遺構内出土遺物	69
写真図版 6	縄文土器(1)	70
写真図版 7	縄文土器(2)	71
写真図版 8	縄文土器(3)	72
写真図版 9	縄文土器(4)・弥生土器(1)	73
写真図版 10	弥生土器(2)	74

写真図版 11	石器(1)	75
写真図版 12	石器(2)	76
写真図版 13	石器(3)	77
写真図版 14	石器(4)	78
写真図版 15	石器(5)	79
写真図版 16	石器(6)・石製品	80
写真図版 17	砥石(1)	81
写真図版 18	砥石(2)・石製品・土師器 須恵器・陶器・金属製品	82

## I 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は、北上市から和賀町・湯田町を經由して秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち、第9次、10次施行命令区間は北上ジャンクションから秋田県境までの延長33.9kmである。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和56年から分布調査を行っており、日本道路公団仙台建設局との間でその取扱いについて協議された。協議の経過は以下のとおりである。

昭和62年4月13日付け	「仙建北工第35号」による分布調査の依頼
5月25日付け	「教文第117号」による分布調査結果の回答
昭和63年9月9日付け	「教文第320号」による平成元年度における発掘調査事業の照会
9月16日付け	「仙建北工第515号」による平成元年度発掘調査事業の回答
昭和63年12月27日及び 平成元年1月21日	日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の3者による埋蔵文化財調査に関する協議

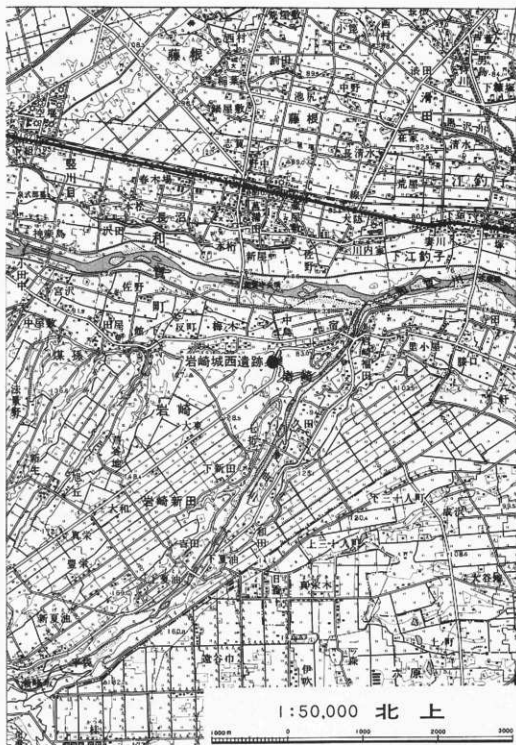
これにより、岩手県教育委員会は調整のうえ、昭和63年度に岩崎台地遺跡群、平成元年度に柳上遺跡、岩崎台地遺跡群、岩崎城西遺跡、梅ノ木台地Ⅰ・Ⅱ遺跡、兵庫館跡、本郷遺跡、石曾根遺跡、月館跡、八幡館跡、八幡野Ⅱ遺跡、田中館跡、越中畑Ⅴ遺跡の13遺跡、合計92,000㎡の調査を岩手県文化振興事業団の委託事業にすることとした。

これをうけて当埋蔵文化財センターは、平成元年4月1日付け委託契約により発掘調査に着手したものである。しかし、梅ノ木台地Ⅱ遺跡と越中畑Ⅴ遺跡の調査は、用地内の買収未了や保安林解除の遅延により次年度以降に実施することとなった。また、梅ノ木台地Ⅰ遺跡、兵庫館跡、本郷遺跡の3遺跡は、同様の理由により調査区域の一部は平成2年度までの継続調査となった。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 位置

本遺跡の所在する和賀町は岩手県の南西部に位置し、北は花巻市、東は江釣子村及び北上市、南は金ヶ崎町及び胆沢町、西は湯田町及び沢内村に接しており、面積は273.75km<sup>2</sup>である。本遺跡は和賀町の南東部に所在し、同町の中央部を横断する東日本旅客鉄道北上線の藤根駅から南方約2.3km付近で、町道城内堂刈場線沿いの段丘上に立地する。同地点は北緯39度17分、東経141度2分付近である。



第1図 遺跡位置図



## 2 地理的環境

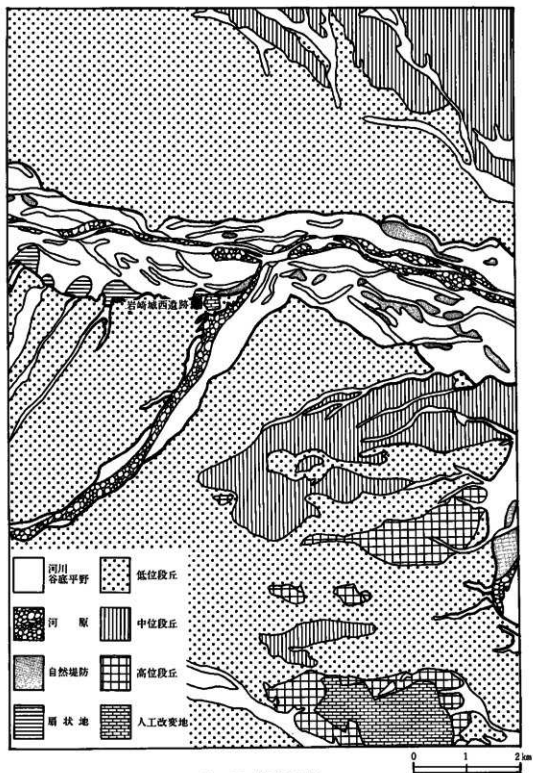
和賀町の詳細な気象データは得られていないが、隣接する北上市では年平均気温は10.8℃、年間降水量は1,334mmで県内では中程度である。しかし、和賀町の西部は奥羽山脈に含まれ、冬季の積雪量は1～1.3mと多量で、隣接する沢内村などは県内では有数の豪雪地帯である。初雪は11月中旬、終雪は3月下旬で積雪期間は約4カ月である。風向は年間を通じ西風が多いが、特に冬季間は北西の季節風が強い。

本遺跡の北約1kmには和賀川が東流し、東約8kmには北上川が南流する。和賀川は奥羽山脈の和賀岳(1,440m)にその源を発し、沢内村、湯田町を経て和賀町に入り、和賀町の中央部を東流して、北上市古川で北上川と合流する全長75kmの1級河川である。同河川は夏油川等1級河川だけでも13河川を支流とする当地では最大の河川であり、古来から人々に生活の場を提供し、同流域には数多くの集落が発達した。現在の和賀町内に限ってみても、上流域から順に仙人、岩沢、山口、横川目、藤根、長沼、煤孫、岩崎の9集落がある。また、湯田町と和賀町の町境にある当楽峡谷でせき止められて作られた湯田ダム(錦秋湖)は、和賀町一帯の水田を潤す農業用水源として重要な役割を担っている。

## 3 地形

本遺跡が所在する和賀町岩崎は北上盆地のほぼ中央に位置する。北上盆地は古生界を主とする北上山地と第三系を主とする奥羽山脈とが南北に並走する間にあって、北上川とその支流が開析したものである。北上川に注ぐ支流のうち大きな河川の殆どは奥羽山脈に水源をもつことから、北上川西岸には河岸段丘や扇状地などがよく発達しているのに対し、東岸には極めて部分的にしか見られない。したがって、北上川の本流は著しく東側に寄って流れている。このように北上盆地の主体部は東流するいくつかの河川によって作り出されたものであるため、大小の段丘や扇状地、河岸平野及び起伏量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となっている。

和賀町の地形はこのような北上盆地の特徴を持ち、町の西部は奥羽山脈に含まれる山地にあたり、中央部から東部は主に3期に大別される洪積世の段丘とその縁辺に認められる沖積世の段丘、それに自然堤防や氾濫源を含む河岸平野から成り立っている。遺跡の所在する岩崎地区は地形学上「金ヶ崎段丘」と呼ばれる洪積世低位段丘と河岸平野とから成り立っている。この段丘は「岩崎新田台地」と呼ばれ、洪積世段丘の中では最も新しい段丘であり、しかも夏油川によって形成された扇状地である。標高100mから200mで起伏量の小さい平坦地であり、一部は山林として利用されている所もあるが、その大部分は水田である。また、河岸平野は和賀川や夏油川及びその支流である多くの小沢によって開析されたもので、同台地とは急崖となって接する。本遺跡は和賀川に面した台地の縁辺にのり、標高113～115mで河岸平野との比高差



第2図 地形分類図

は20～30mである。また、和賀川と夏油川との合流点からは南西1.7kmの距離にある。現況は山林である。

#### 4 基本層序

遺跡の層序は全域がほぼ同様の層序を呈しているが、右に示した土層柱状図はⅢ J 09グリッドで作成したものである。各層の概略は以下のとおりである。

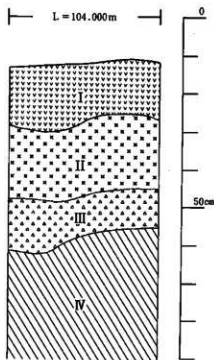
I層 黒褐色土 (Hue10YR2/2) 腐葉土を主体とする現表土で、遺跡全面を覆う。

層厚10～20cmで、粘性の少ないシルト質土である。炭化材小片や小礫(径1cm前後)が若干含まれる。

II層 黒色土 (Hne7.5YR2/1) 弱い粘性のあるシルト質土で、層厚10～30cmである。炭化材小片や小礫が含まれる。遺物の大半はこの層から出土している。

III層 暗褐色土 (10YR3/3) 礫が多量に含まれる粘性土である。

IV層 褐色土 (10YR4/6) 弱い粘性がみられる。大小の礫が多量に含まれており層厚は2m以上である。



第3図 土層柱状図

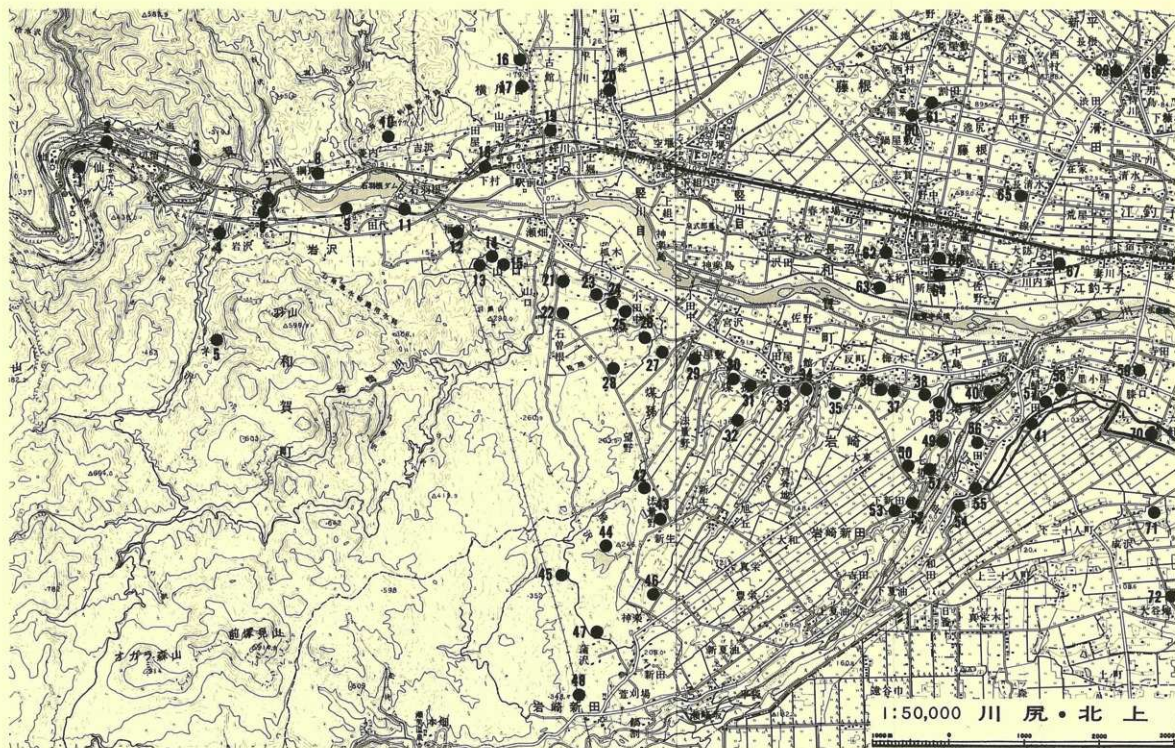
#### 5 周辺の遺跡

和賀町には現在120カ所をこえる遺跡が登載されているが、第4図・第1表にはその一部と江釣子村及び北上市の一部に掲載したものである。和賀川を中心とした遺跡の分布をみると、和賀川左岸では、中位段丘やその縁辺部および開析された小支谷沿いに縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、河岸低地にも若干認められる。調査された主な遺跡としては、鳩岡崎遺跡(縄文・奈良～平安時代の竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器等)、新平遺跡(平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等)、藤沢遺跡(平安時代の竪穴住居跡、溝状土坑、縄文土器等)、九年橋遺跡(縄文晩期の土器等)等があげられる。また、低位段丘上や低位段丘に沿って河岸低地に形成された自然堤防上には、奈良～平安にかけての遺跡が多く分布する

傾向が認められる。調査された主な遺跡としては、下谷地遺跡（縄文土器、土師器、須恵器）、長沼古墳群（古墳13基、鉄刀、勾玉、切子玉等）、猫谷地古墳群、五条丸古墳群等があげられる。

和賀川右岸では、丘陵縁辺や中・低位段丘上および開析された支谷に沿って縄文時代～平安時代の遺跡が分布し、段丘の北側縁辺部には湧泉や深く入り込んだ沢や急崖を利用した城館遺跡が分布している。調査された主な遺跡としてはまず和賀仙人遺跡があげられる。この遺跡は昭和40年と翌年の二次にわたって調査が行われ、段丘構成層から旧石器が出土している。そのほか、低位段丘上に立地する下岩沢Ⅰ遺跡（土坑、縄文土器、弥生土器等）、岩崎城跡（土塁、溝、掘立柱建物跡、中近世陶器等）、岩崎城跡の西半部分にあたる梅ノ木遺跡（縄文・古代・中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、縄文土器等）、成沢遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土師器等）等がある。中位段丘上に立地する遺跡としては下成沢遺跡（旧石器、縄文土器、土師器等）、上大谷地遺跡（平安時代の竪穴住居跡、縄文土器、土師器等）等があげられる。

また、平成元年度には自動車道建設に関連して低位段丘の縁辺部に立地する10カ所の遺跡が調査され、調査の結果、田中館跡（土坑、縄文土器、土師器等）、八幡野Ⅱ遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、縄文土器等）、八幡館跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、土師器等）、月館跡（堀跡、欄状遺構、陥し穴状遺構、縄文土器等）、石曾根遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等）、本郷遺跡（縄文、平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等）、兵庫館跡（建物跡、弥生土器等）、梅ノ木台地Ⅰ遺跡（平安時代の竪穴住居跡、陥し穴状遺構、縄文土器等）、岩崎台地遺跡群（平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝、土坑、陥し穴状遺構、土師器、須恵器等）等の遺構、遺物が発見されている。



第4図 周辺の遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	和賀仙人	散布地	旧石器	仙人第1地割		梅ノ木 台地Ⅱ	集落跡	縄文土器	岩崎9地割
2	切畑Ⅰ	散布地	縄文土器(中・後期)	仙人字切畑	37	梅ノ木 台地Ⅱ	集落跡	縄文土器	岩崎10地割
3	人当Ⅰ	散布地	縄文土器(中期)、石斧 石鏃、石匙	仙人第9地割	38	梅ノ木 台地Ⅰ	集落跡	縄文土器	岩崎10地割
4	法ヶ松Ⅰ	散布地	縄文土器、石斧、石匙	岩沢字法ヶ松	39	岩崎城西	散布地	縄文土器、土器	岩崎10地割
5	水沢館	館跡	中世	岩沢第8地割	40	岩崎城	館跡	銅鉄鏡、縄文土器(中・ 晩期)鉄槌、鉄片	岩崎18地割
6	岩沢Ⅰ	散布地	縄文土器(後・晩期)、石器	岩沢	41	岩崎台地 遺跡群	集落跡	穴穴住居址、土師器、 須恵器	岩崎12地割ほか
7	下岩沢Ⅰ	集落跡	土坑、縄文土器、弥生土器	岩沢字飯田	42	望野Ⅰ	散布地	縄文土器(中期)	煤孫3地割
8	鳥谷森	散布地	縄文土器(晩期)、石鏃、 石匙	横川日字鳥谷森	43	望野Ⅱ	集落跡	縄文土器(前・後期) 尖頭器、石斧、旧石器	煤孫4地割
9	岩沢館	館跡	縄文土器、陶器	下仙人9地割	44	代官森Ⅰ	散布地	縄文土器、石器	岩崎新田4地割
10	愛宕山	散布地	縄文土器、石器	横川目5地割	45	代官森Ⅱ	散布地	土坑、石斧	岩崎新田4地割
11	田代	集落跡	縄文土器(晩期)、石鏃、 石鏃、石鏃	山口字田代	46	神楽	散布地	縄文土器、石器	岩崎新田5地割
12	指田	散布地	縄文土器(中・晩期)、石 器	山Ⅰ	47	廣沢	散布地	縄文土器	岩崎新田2地割
13	馬場館	館跡	中世	山Ⅱ23・24	48	水神	散布地	縄文土器、石斧、石匙	岩崎新田2地割
14	横田屋	屋		山Ⅱ23	49	七折館	館跡	中世	岩崎15地割
15	山口館	館跡	中世	山Ⅱ45・46	50	花曾根上	集落跡	縄文土器、土師器、須 恵器	岩崎5地割
16	八幡館	館跡	縄文土器(晩期) 弥生土器、石器	横川目7地割	51	七折	集落跡	縄文土器(中・後・晩期) 石器、紡錘車	岩崎5・15地割
17	熊森	散布地	縄文土器(中・後期)、石 器	横川日字山田熊 森	52	花曾根	散布地	須恵器	岩崎5地割
18	大橋	散布地	縄文晩期注Ⅰ土器、石 器	横川目字大橋	53	新田Ⅰ	散布地	石鏃、土師器、須恵器	岩崎7地割
19	椎川館	館跡	甕・土器、縄文土器(中 期)	横川日字椎川館	54	八天取	散布地	土師器、須恵器	岩崎8地割
20	旗の 古墳群	古墳群	古銭、人骨	横川日字旗の森	55	久田Ⅰ	散布地	土師器、須恵器	岩崎14地割
21	田中館	館跡	土師器、石器	山口字田中館	56	寺村	散布地	縄文土器、土師器	岩崎14地割
22	八幡野Ⅰ	散布地	縄文土器	煤孫1地割	57	小寺	散布地	土師器、須恵器	岩崎12地割
23	八幡野Ⅱ	散布地	縄文土器、土師器、須 恵器	山Ⅱ40地割	58	小平	散布地	縄文土器、土師器、須恵 器	岩崎12地割
24	八幡館	館跡	縄文土器、中世	山口40地割	59	里小尻	散布地	土師器、須恵器	岩崎32地割
25	月館	館跡	甕・土器、磁器 縄文土器、石器	煤孫1地割	60	稲妻Ⅰ	散布地	土器、土師器、須恵 器	藤根字稲妻
26	石曾根	集落跡	穴穴住居址、縄文土器 (中・晩期)、石器、弥生 土器、土師器	煤孫2地割	61	鹿見館	館跡	縄文土器、石匙、石鏃、石斧	藤根字鹿見
27	本郷	集落跡	穴穴住居址、縄文土器 (中期)土師器、須恵器	煤孫2地割	62	長沼古墳群	古墳群	鍬手刀、直刀、鉄鏃 勾玉、切子玉	長沼
28	荒原沢	散布地	縄文晩期器	煤孫2地割	63	葛瀬田 古墳群	古墳群	土器、鍬手刀(鉄刀) 直刀(鉄刀)	長沼字葛瀬田
29	林崎館	館跡	縄文土器、中世	煤孫3地割	64	念仏車	散布地	縄文土器(前・中・後期) 弥生土器、石鏃	長沼字葛瀬田
30	中屋敷	散布地	土器、土師器	煤孫3地割	65	長清水Ⅰ	散布地	縄文土器(前期和)、土師器	藤根字長清水
31	法皇野Ⅰ	散布地	石鏃	煤孫4地割	66	蔵屋敷	集落跡	土器、弥生、土師器	江釣子村
32	法皇野Ⅱ	散布地	縄文土器、石匙	煤孫4地割	67	下江釣 子羽場	集落跡	土器、土師器	江釣子村
33	煤孫	集落跡	縄文土器、石匙	煤孫5地割	68	新平	集落跡	縄文土器(前・中期)、弥 生、土師器、土器、土 師器、須恵器	江釣子村
34	観音館	館跡	土器、須恵器 甕・土器	煤孫5地割	69	柳上	散布地	縄文土器、土師器、須恵 器	北上市
35	上友町	散布地	縄文土器(中～後期)	煤孫6地割	70	中佐野 徳和遺跡群	館跡	土器、土師器、須恵器	北上市
36	兵庫館	散布地	縄文土器、銅片石器	岩崎9地割	71	成沢	集落跡	土師器、須恵器	北上市
					72	大谷地	集落跡	縄文土器	北上市

### Ⅲ 調査方法と室内整理の方法

#### 1 野外調査

##### (1) グリッドの設定

グリッドの設定にあたっては、調査対象区域内にある東北横断自動車道本線の中心杭STA32+20を基準点1、STA32+60を基準点2とし、この2点を結ぶ直線を基準線（東西の軸線）とした。次に基準線に直交し、基準点1を通る直線を設定し、南北の軸線とした。基準点1を基点に南北の軸線に平行する直線で40m毎に区切り、大区画とした。大区画をさらに4mメッシュで区切り、小区画とした。グリッドの名称は大区画を西から東へⅠ区、Ⅱ区…とし、小区画は西から東へ大区画毎にA～Jを付し、北から南へは調査区全体を通して00～20を与えた。小区画名は、これらを組み合わせて、IF12グリッド、ⅢB04グリッドなどのように呼称した。なお、磁北の方向は南北の軸線から約17度30分西偏している。また、基準点の成果値は、日本道路公団の路線内中心杭座標計算書によると以下のとおりである。

基準点1 X=-80,218.56577 Y 17,908,89939 H 114.128m

基準点2 X=-80,211.87354 Y 17,869,46323 H 114.366m

##### (2) 粗掘り・遺構検出

調査区域内の数カ所にトレンチを入れて検出面までの深さや層序の確認をした後、表土の除去は重機で行った。遺構検出面までの土層の除去及び遺構の検出は人力で行った。粗掘り後若干の遺構が検出された。遺構名は小グリッド名を付し、IF15焼土、IVD11炭灰跡などのように呼称した。

##### (3) 遺構の精査・出土遺物の取り上げ

遺構精査は炭灰跡を2分法、溝跡については数カ所に土層確認のためのベルトを残して掘り下げた。精査の各段階で図面の作成や写真撮影等必要な記録をとった。出土遺物の取り上げは遺構内のは遺構名、出土位置、レベルを記録し、遺構外のは小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。

##### (4) 実測

平面実測はグリッド軸に合わせた1mメッシュを基本とする簡易遺り方測量法で行い、IVF11区の北西端（基準点1）を原点とする座標系を用いた。断面図は任意の高さで作成した。実測図はすべて20分の1の縮尺で作成した。

##### (5) 写真撮影

写真撮影には、6×7cm判モノクロ1台、35mm判のモノクロとカラーリバーサル各1台を使用した。

## 2 室内整理

### (1) 作業手順

遺構については現地で作成した実測図の点検、合成、第2原図の作成、トレース、図版作成の順に進めた。遺物については接合、復元、仕分、登録を行った後、原則として実測図や拓本の作成、トレース、写真撮影、図版作成の順に進めた。

### (2) 図版

本報告書に掲載した遺構実測図の縮尺は、柱穴列、炭竈跡、焼土遺構は40分の1、溝跡は80分の1を原則としたが、これに該当しないものは別に縮尺を付した。基本層序の層位はローマ数字、遺構埋土の土層はアラビア数字で表わした。方位は磁北を示す。遺物実測図および土器拓影の縮尺は、剥片石器が2分の1、その他は3分の1を原則としたが、これに該当しないものは縮尺率を別に付した。遺物に付した番号は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器を一括して連番とし、石器・石製品、金属製品は各種別に連番とした。なお、図版掲載番号と写真図版掲載番号は統一している。

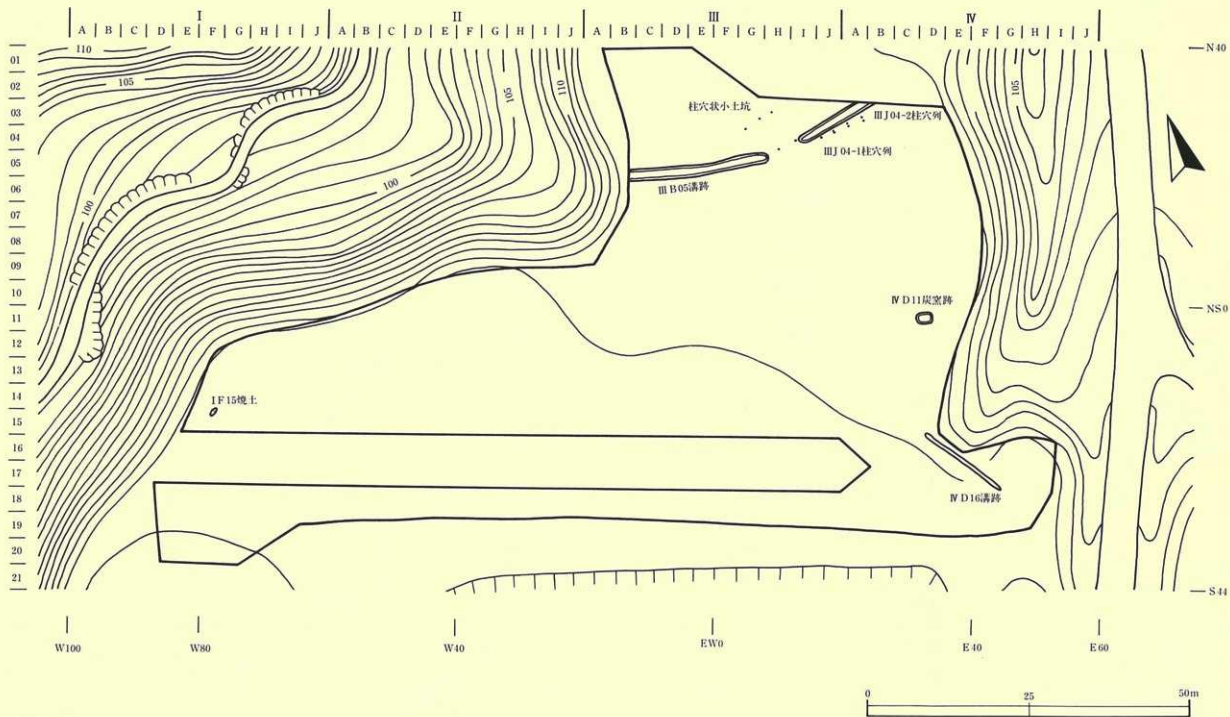
遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリーントーンの種別は以下のとおりである。







第5図 調査区周辺地形図



第6图 岩崎城西遺跡・遺構配置図

## Ⅳ 検出された遺構と出土遺物

本遺跡から検出された遺構は、溝跡3条、柱穴列2列、柱穴状小土坑5基、炭窯跡1基、焼土遺構1カ所である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器、石製品、金属製品等である。

### 1 遺構と遺構内出土遺物

#### (1) Ⅲ B 05溝跡およびその周辺の遺構

##### Ⅲ B 05溝跡

##### <遺構> (第7図、写真図版2・3)

本遺構は調査区北側から検出され、中央付近から西側へのびるものと、東側へのびるものの2条で構成される。検出面は基本層序第Ⅲ層である。2条の溝は形状や規模に若干の相違はみられるが、検出面が同一であることや配置の状況から、中央部を出入り口とする一連の溝と考えられる。以下、西側にのびるものを溝A、東側にのびるものを溝Bとして記述する。

溝Aは、平面形が中央付近で南側に若干膨らむ弧状を呈し、西端は段丘崖まで達する。規模は長さ23m、上幅1.4~2.0m、下幅60~120cm、深さは20~40cmである。断面形は、浅いU字状である。壁は底面から内弯気味に外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、西端部が若干浅く凹む。溝Bは、ほぼ直線的にのびて長さ10m以上、上幅1.5~1.7m下幅30~40cm、深さ40~50cmである。断面形は箱薬研状である。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、西端部は若干凹み、全体に西端から東端に向かって比高差20cm程で傾斜しているが、この傾斜は地形の傾斜方向にほぼ一致する。埋土はおもに黒褐色土および黒色土で構成され、埋土中部から下部に多量の礫が混入する。

両溝間の出入り口と考えられる部分の幅は約5.3mで、溝の周辺には柱穴状小土坑が5基、溝Bに沿って柱穴列が2列存在する。

##### <出土遺物> (第12図、写真図版5)

溝A出土遺物 いずれも埋土から出土したものである。

石器 1・2は砥石である。1は2面の使用面がある。1面には彫りの深い線条痕が認められる。2は扁平な礫の1面が使用され、使用面は凹状に弯曲する。3・4は凹石で、両者共表裏両面に1~2カ所の凹みを有する。5は縁をもつ石皿で、使用面は僅かに凹状を呈している。

溝B出土遺物 いずれも埋土から出土したものである。

石器 6・7は砥石の破片と考えられ、使用痕を残すものである。8は不定形石器で、縦長な剥片の両側縁に両面調整による刃部が形成される。

金属製品 1・2は釘状鉄製品で、頭部は折り曲げられている。横断面形は1が方形、2は長方形を呈する。1は長さ4.4cm、2は長さ4.7cmである。

縄文土器 1～3はいずれも深鉢の胴部片で、1はLRの単節斜縄文、2・3はRLの単節斜縄文が施される。

### Ⅲ J04-1 柱穴列

<遺構> (第8図、写真図版3)

本遺構はⅢ B05溝跡の溝Bに沿って、その南側に位置する。検出面は基本層序第Ⅲ層下位面である。本遺構はⅢ J04-2 柱穴列と重複し、本遺構の一部がⅢ J04-2 柱穴列に切られている。

本遺構は4柱穴1連のものと考えられ、ほぼ東西に直線的に並ぶ。柱穴列の方向はE-4°-Nを示し、溝の走行方向からは約7度南偏している。柱穴は西端から2.3m・2.4m・2.4mの3間に配置され、これを尺に換算すると7.6尺・7.9尺・7.9尺となる。柱穴の規模は下表のとおりであるが、掘り方は径29～38cm、深さ34～48cmで、平面形は開口部がほぼ円形で、底部は円形または楕円形を呈する。埋土はおもに黒褐色土および暗褐色土で構成される。柱当りの認められるものがあり、それらや底部の規模等から径12～16cm程の丸柱が据えられていたものと推定される。

遺物は出土していない。

No	P 1	P 2	P 3	P 4
開口部径	30×?	29×?	32×32	38×36
底部径	15×15	18×16	15×12	16×16
深さ	45	34	38	48

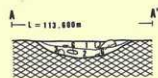
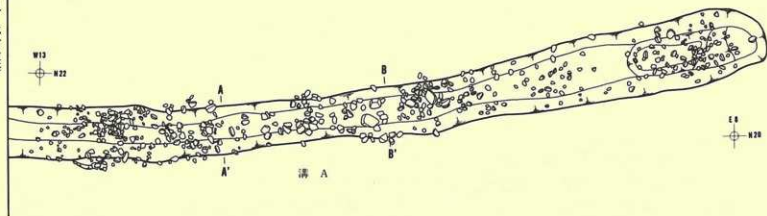
(単位cm)

### Ⅲ J04-2 柱穴列

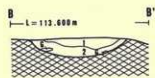
<遺構> (第8図、写真図版3)

本遺構はⅢ B05溝跡の溝BとⅢ J04-1 柱穴列との間に位置する。検出面は基本層序第Ⅲ層下位面である。本遺構はⅢ J04-1 柱穴列と重複し、その一部を切っている。

本遺構は4柱穴一連のものと考えられ、ほぼ東西に直線的に並ぶ。柱穴列の方向はE-6°-Nを示し、溝の走向方向からは約5度南偏している。柱穴は西端から2.3m・2.35m・2.35mの3間に配置され、これを尺に換算すると7.6尺・7.8尺・7.8尺となる。柱穴の規模は下表のとおりであるが、掘り方は径30～50cm、深さ32～48cmである。平面形は開口部がほぼ円形また

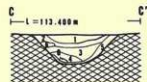
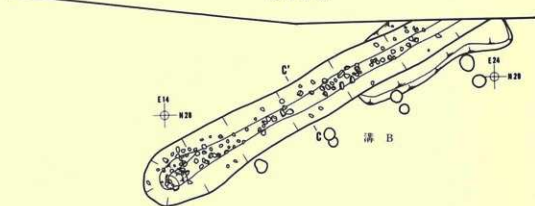


1. 10VR2-2 黒褐色土 炭化材片及び礫が混入
2. 10VR2-1 黒色土 炭化材片及び礫が混入
3. 10VR3-6 黄褐色土

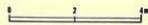


1. 10VR2-2 黒褐色土 小礫が混入
2. 10VR2-1 黒色土 炭化材小片及び黄褐色土が粒状で若干混入
3. 10VR3-6 黄褐色土

調査区外

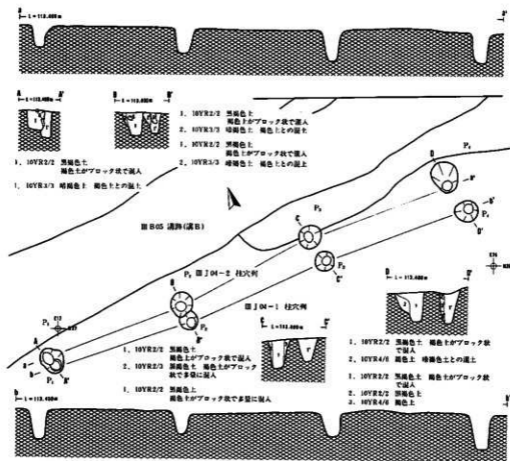


1. 10VR2-2 黒褐色土 粘性なし 炭化材片が混入
2. 10VR2-2 黒褐色土 炭化材片が混入 黄褐色土が小ブロック状で散在
3. 10VR1-2 黒色土 黄褐色土が粒状で若干混入
4. 10VR2-2 黒褐色土
5. 10VR3-2 黒褐色土 黄褐色土がブロック状で若干混入
6. 10VR3-6 黄褐色土



(断面図の縮尺率は平面図の2:1)

第7図 III B05 溝跡



第8図 Ⅲ J04-1・2 柱穴列

は不整形形で、底部は円形または楕円形を呈する。埋土はおもに黒褐色土および暗褐色土で構成される。柱当りの認められるものがあり、底部の規模等から径16~20cm程の丸柱が据えられていたものと推定される。

遺物は出土していない。本遺構は重複関係や配置の状況等から、Ⅲ J04-1 柱穴列の作り替えと考えられる。

No.	P 1	P 2	P 3	P 4
開口部径	30×?	36×37	38×36	32×50
底部径	22×16	18×16	18×14	16×16
深さ	32	36	46	48

(単位cm)

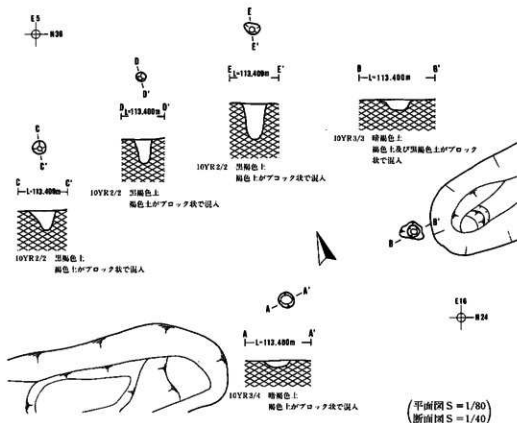
### 柱穴状小土坑

<遺構> (第9図)

Ⅲ B05溝跡の周辺から柱穴と考えられる小土坑が5基検出されている。調査区北側中央部の溝が跡切れる部分に2基並列し、その北側5.5m付近に3基並列する。検出面は基本層序第Ⅲ層下位面～第Ⅳ層上位面である。

溝が跡切れる部分に東西に並列する2基は、E-10°-N方向にあり、柱間は3.3mである。掘り方の規模は西側が径30×32cm、深さ7cm、東側が径24cm前後、深さ12cmである。平面形は開口部・底部共に円形または不整形円形を呈し、これらの2基は溝B側に寄る配置状況を呈している。埋土は暗褐色土で構成される。

北側の3基は東西にはほぼ直線的に並び、E-11°-N方向にあって柱穴列とも考えられる。2.6mの等間に配置されており、さらに東側調査区外にのびる可能性もある。掘り方の規模は西端が径27×27cm、深さ21cm、中央が径21×20cm、深さ27cmで、東端は径28×28cm、深さ38cmである。平面形は、いずれも開口部、底部共にほぼ円形を呈する。埋土は褐色土が小ブロック状



第9図 柱穴状小土坑

で混入する黒褐色土で構成される。

いずれの遺構からも遺物は出土していない。

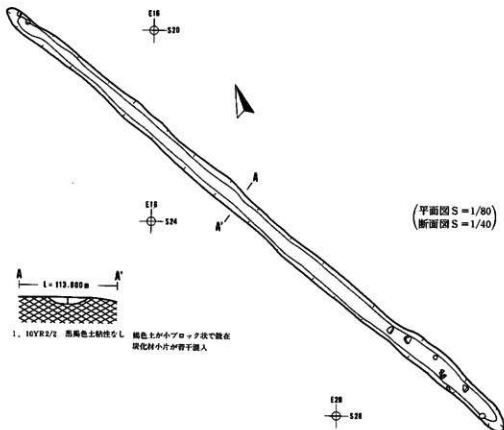
## (2) VD16溝跡

<遺構> (第10図、写真図版4)

本遺構は調査区南東端部に位置する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。

規模は長さ13.5m、上幅40～60cm、下幅10～30cm、深さ10cm前後で、北西-南東方向にほぼ直線的に走る。断面形は浅いU字状である。壁は底面から内弯気味に外傾して立ち上がる。底面は凹凸がみられ、南東端から北西端に向かって比高差10cm程で緩やかに下降する。埋土はおもに黒褐色土で構成される。

遺物は出土していない。



第10図 VD16 溝跡



### (3) ND11炭窯跡

#### <遺構> (第11図、写真図版4)

本遺構は調査区中央東端部に位置する。検出面は基本層序第Ⅲ層上位面である。

平面形は不整な楕円形で、短軸の断面形は浅いU字状を呈する。規模は開口部の長軸2.5m、短軸1.6m、底部の長軸2.4m、短軸1.25mで、深さは最大30cmである。長軸の方向はほぼ東西方向を示している。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、西端から東端に向かって緩やかに下がる。底面には炭化材が散在し、中央付近には淡い粉状の焼土が広がっていたが、底部や壁の焼土化は認められない。埋土はおもに黒色土および黒褐色土で構成され、埋土下部には多量の炭化材片が混入する。なお、底面に散在していた炭化材は、樹種鑑定の結果、ナラ材である。

#### <出土遺物> (第11図、写真図版5)

土師器 4・5は埋土から出土したもので、坏の破片である。4は口縁部片、5は底部片で、同一個体と考えられる。ロクロ成形で、口縁部はほぼ直立する。底部の切り離しは回転糸切りで底部外面の再調整はみられない。

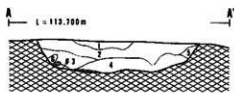
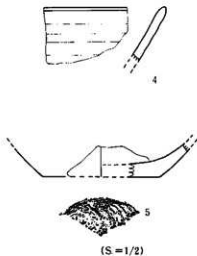
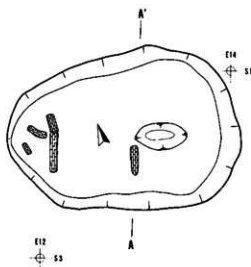
### (4) IF15焼土

#### <遺構> (第11図、写真図版4)

本遺構は調査区南西端部の段丘縁辺に位置する。検出面は基本層序第Ⅲ層上位面で、焼土は風倒木痕の黒色土部分に形成されたものである。

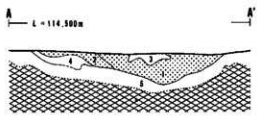
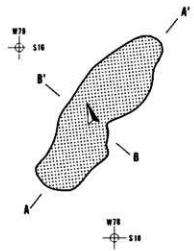
焼土は長さ1.95m、幅60cm程で不整楕円形状に広がっており、最大層厚30cm程で赤色変化を受けている。焼成は比較的良好である。

遺物は出土していない。



1. 7.5YR17/1 黒色土 黒褐色土がブロック状で混入 炭化材小片及び小礫が混入
2. 7.5YR3/2 黒褐色土 炭化材片が少量混在 小礫が若干混入
3. 7.5YR1/2 黒褐色土 炭化材片及び炭褐色土がブロックが少量混入
4. 7.5YR2/2 黒褐色土 炭化材片が多量に混入 焼土粒が若干混入
5. 10YR4/0 褐色土 黒褐色土との混入
6. 10YR6/8 明黄褐色土

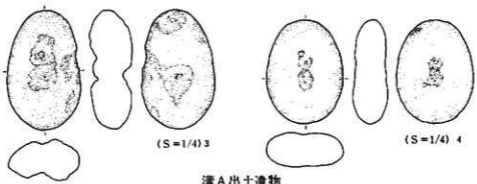
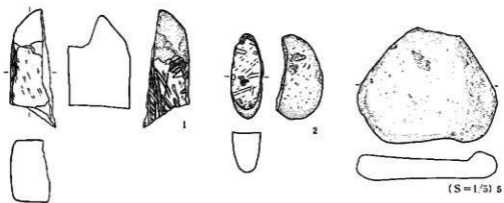
WD11 炭窯跡・出土遺物



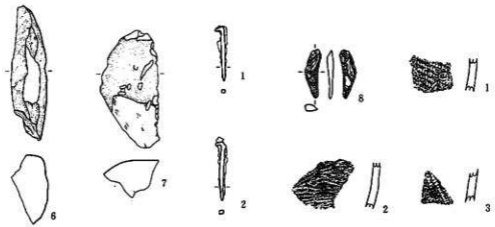
1. 5YR5/9 明赤褐色土 焼土 かたくしまる
2. 5YR3/4 暗赤褐色土 焼土
3. 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土が粉状で混在 炭化材片が混入
4. 7.5YR3/2 黒褐色土 炭化材片が若干混入
5. 7.5YR2/1 黒色土 黄褐色土がブロック状で少量混入

IF15 焼土

第11図 WD11 炭窯跡・IF15 焼土



溝A出土遺物



溝B出土遺物

第12圖 III B05 溝跡出土遺物

## 2 遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器・石製品、金属製品などであるが、量的には非常に少ない。土器はコンテナ3箱、石器・石製品120点余り、金属製品1点である。

### (1) 縄文時代・弥生時代の遺物

#### ① 土器

出土した縄文土器は時期別にⅠ～Ⅳ群に分類し、弥生土器を第Ⅴ群とした。

#### <第Ⅰ群土器> (第13・14図、写真図版6・7)

本群には縄文時代前期に属する土器を一括し、文様等の違いから1～5類に細分した。

1類(6～14) 6～11は深鉢の口縁部片、12～14は胴部片で胎土には繊維が混入し、焼成は比較的良好である。器形は胴部が屈曲の少ないもので底部を欠くことから詳細は不明であるが、胴部片の傾きからは尖底に近い器形をなすものと推定される。いずれも単節斜縄文が施される。6～11は平口縁で、6～8は口唇部に刻み目をもち、9は口縁上端部に刺突が施される。

2類(15～19) いずれも深鉢の胴部片で胎土には繊維が混入し、羽状縄文が施される。16・19には結束第1種の羽状縄文が施される。

3類(20～25) 20は深鉢の口縁部片、21～25は胴部片で、胎土には繊維や粗砂が多く混入している。20は平口縁と推定され、いずれにも器表面にS字状連鎖沈文が横位に施される。

4類(26～35) 26～28・31は深鉢の口縁部片、29・30は胴部片で厚手の胎土に繊維は混入していない。26は波状口縁で、波頂部に2つの刻み目が施される。3個の突出部が作り出される。波頂部下位に2個一対と考えられる円形の凹みが施され、その下位に沈線による鋸歯状文が数段にわたって施される。27は平縁で、口唇部直下に1条の沈線文が巡らされ、その下位に沈線による曲線文や渦巻状文が施される。28は沈線による渦巻状文が施され、その中心部にボタン状の突瘤が貼付される。29は沈線による曲線文、30は曲線文が施される。31～34はIJ13グリッドから一括出土したもので、出土状況や胎土等から同一個体と考えられる。波状口縁を呈する深鉢と推定され、31は口縁部に曲線状の隆帯が貼付され、その下位に沈線による鋸歯状文が施される。33・34は底部片で、胴最下部に鋸歯状文が横位に施される。35は深鉢の胴部片で、単節斜縄文と縦位の綾絡文が施される。

5類(36～39) いずれも深鉢の口縁部片で、平縁である。口縁上端部に刻み目が施される。36・37はLRの単節斜縄文が施され、38・39はRLの単節斜縄文が施される。38・39には縄文原体末端の回転による縄文が認められる。

＜第Ⅱ群土器＞（第14図、写真図版7）

40～47の縄文時代後期に属する土器を一括した。40～43は深鉢の口縁部片で、同一個体と考えられる。波状口縁を呈し、口縁部は無文で波頂部から縦位の隆帯が垂下し、その下位に横位の隆帯が口唇部に平行に巡らされる。隆帯上には刺突が施され、縦横の隆帯の結合部には刺突を伴うボタン状の突起が貼付される。横位の隆帯に接してその下位に沈線文が1条巡らされ、胴部には熱糸文が施される。44・45は深鉢の胴部片で、2本一対の隆帯が縦位に貼付される。胴部にはLRの単節斜縄文が施され、狭い隆帯間は無文である。46・47は波状口縁で、折り返し口縁である。波頂部には1個の刻み目が施され、器表面は無文である。

＜第Ⅲ群土器＞（第15・16図、写真図版7・8）

縄文時代晩期に属する土器を一括し、文様等の違いから1～5類に細分した。

1類（48～58） 48～52は鉢の口縁部片である。48～51は口唇部にB型突起が付されるもので、口縁部には平行沈線文や三叉文が施される。48は胴部にLRの単節斜縄文が施される。52は小波状口縁で、口縁部に三叉文、その下位に平行沈線文が施され、胴部にLRの単節斜縄文が施される。53～58は鉢の胴部片である。53～56は胴上部の破片で、胴上部は無文地に三叉文や沈線文が施される。57・58は胴下部の破片で、平行沈線文が横位に巡らされ、その下位にはLRの単節斜縄文が施される。

2類（59～62） いずれも鉢の口縁部片である。59は口縁部が僅かに外反し、口唇部に刻み目が連続して施される。口縁部は無文で、胴上部の屈曲部に平行沈線文が施される。60～62は口縁部がほぼ直立し、口唇部に刻み目が施される。60は口唇部に小突起をもつ。文様は口唇部に平行する2条の平行沈線文が巡らされ、沈線間に押し引き状の刺突文が連続して施される。

3類（63～75） いずれも深鉢の口縁部および口縁部付近の破片である。63～72は口縁部が僅かに外傾し、口唇部には指頭疣状の刻み目が連続して施される。文様は比較的幅の広い浅目の平行沈線文が口唇部に沿って4～5条巡らされる。73は口縁部片、74・75は口縁部付近の破片で、73は口唇部に細い刻み目が施される。73～75は細目の平行沈線文が数条施される。

4類（76～78） 76は深鉢の口縁部～胴上部の破片で、77・78は口縁部片である。76は胴上半部に膨みもち、口縁部は緩く外反する。いずれも口唇部に指頭疣状の刻み目が連続して施され、口縁部は無文である。76は胴部にLRの単節斜縄文が施される。

5類（78・80） いずれも無文の土器である。79は小型の鉢でほぼ完形である。器高6.3cm、口径9.5cmである。器形は胴上半部に最大径もち、頸部が若干くびれ、口縁部は緩く外反する。80は小型の壺または鉢で、口縁部は欠損している。朱塗りのものである。

<第Ⅳ群土器> (第16・17図、写真図版8・9)

第Ⅱ群、第Ⅲ群に伴うと考えられる粗製の土器および無文の土器を一括した。

粗製土器 (81~95) 81~86は口縁部がやや開く深鉢の口縁部片である。81・82・85は平口縁で、LRの単節斜縄文が施される。83・84は同一個体と考えられる。波状口縁で、粗い縄文が施される。86はRLの単節斜縄文が施される。87~90は口縁部が内傾またはほぼ直立する深鉢で、いずれも平縁である。87はRLの単節斜縄文が施され、88はLRの単節斜縄文が施される。89は器高30.9cm、口径23.2cmのほぼ完形である。90は一括出土したもので、図上復元したものである。89・90は共にLRの単節斜縄文が施される。91~93は底部片でいずれもLRの単節斜縄文が施される。94・95は深鉢の胴部片で共に網目状燃糸文が施される。

無文の土器 (96~105) 96は小型深鉢の口縁部から胴上部の破片で頸部が若干くびれ、口縁部は緩く外反する。97~101は深鉢または鉢の口縁部片である。100・101は表裏両面がよく研磨されている。102~105は深鉢の口縁部片で同一個体と考えられる。頸部がくびれ、口縁部はやや強く外反する平口縁である。胎土には砂粒が多く混入し、器面調整はやや粗雑である。

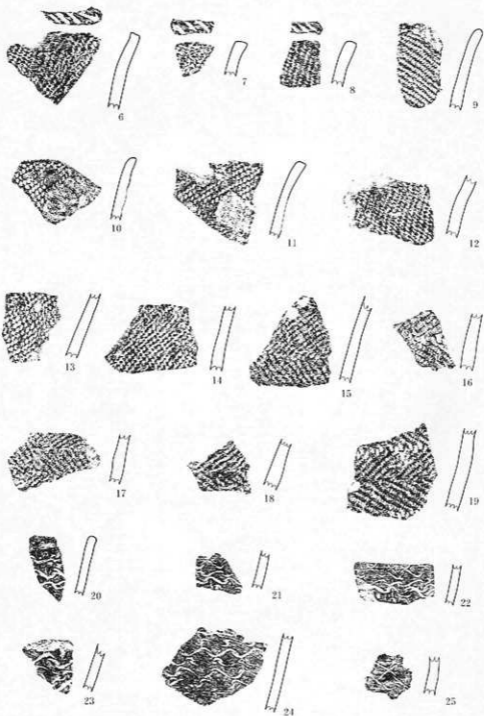
<第Ⅴ群土器> (第18・19図、写真図版9・10)

弥生時代に属する土器を一括したが、すべて破片資料であり、器形・文様等その全容は把握し難いものである。文様等の違いから2類に細分した。

1類 (106~111) 本類には沈線によって文様が施されるものを一括した。106~108は小型甕形土器の破片である。106は頸部が若干くびれ、口縁部が緩く外反し口唇部に沿って2条の平行沈線文が施され、その下位から胴部に変形工字文が連続して施される。また、口縁部内面にも1条の沈線文が施される。107・108は胴部の細片であるが、文様はほぼ106に類似するものと考えられる。109~111は浅鉢または高坏形土器の口縁部片で、同一個体と考えられる。口縁部は外反する波状口縁である。口唇部に沿って波状の沈線文が1条巡らされ、その下位に平行沈線文が施される。また、口唇部にも1条の沈線文が施され、口縁部内面にも2条の沈線文が施される。

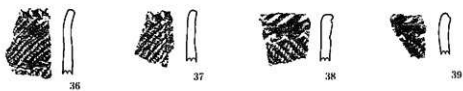
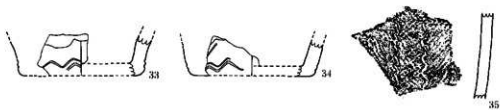
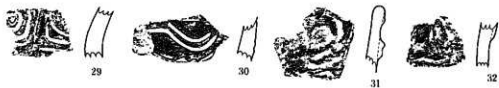
2類 (112~141) 地文に縄文が施される粗製の土器を一括した。112~128は口縁部が長く外反する甕形土器の破片である。112~114は頸部が無文で、口縁部には縦位の縄文が施され、113・114は口唇部に縄文原体が押圧される。115は胴上部の破片で、胴部には単節斜縄文が施され、頸部は無文である。116・117は口縁部片で、口唇部が外方に削られるものである。口縁部に縦位の縄文が施され、口縁上部に刺突が施される。116は朱塗りで頸部は無文である。118~120は口縁部片で口縁部に単節斜縄文が施された後、口縁上部に刻み目が施され、その下位に1条の沈線文が巡らされる。また、口唇部にも縄文原体が押圧される。121~123、126

～128は口縁部が肥厚するものである。121・122は肥厚する下部に上下2個一対の刺突が連続して施され、その下位は無文でいずれも朱塗りである。123は肥厚する下部に刺突が連続して施され、その下位は無文である。124・125は123と同一個体の胴部片で、単節斜縄文が施される。126～128は口縁部が僅かに肥厚する。肥厚部分には単節斜縄文が施され、その下位は無文である。また、口唇部にも縄文原体が押圧される。129～134は底部片である。129・130は出土状況や胎土等から116の口縁部片と同一個体と考えられる。133は胴部に縦位の縄文が施されるが、129～132・134は胴部に縦位または斜位の縄文が施され、胴最下部では横位または斜位に条の方向を変えて縄文が施される。129・130・134は底部外面にも縄文が施される。135～141は壘形土器の胴部片で、燃糸文が施される。縦位および斜位の燃糸文が施され、135は施文の方向が変えられ、条の先端が若干交叉している。

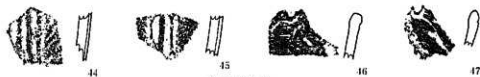


第13图 第1群土器



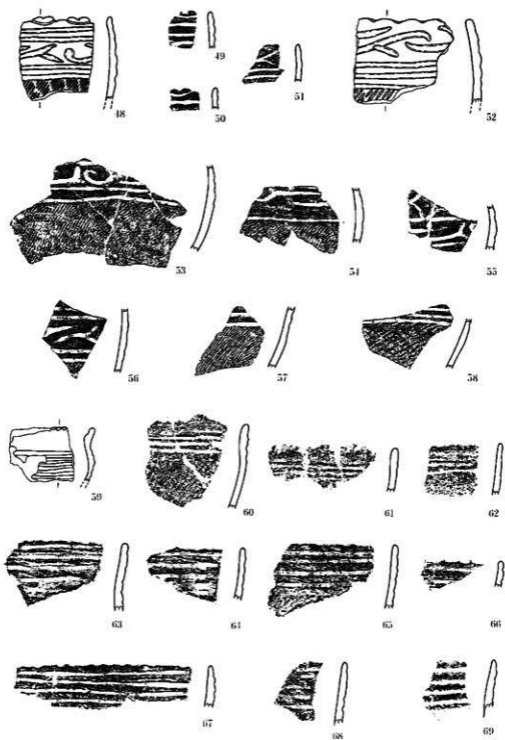


第 I 群土器

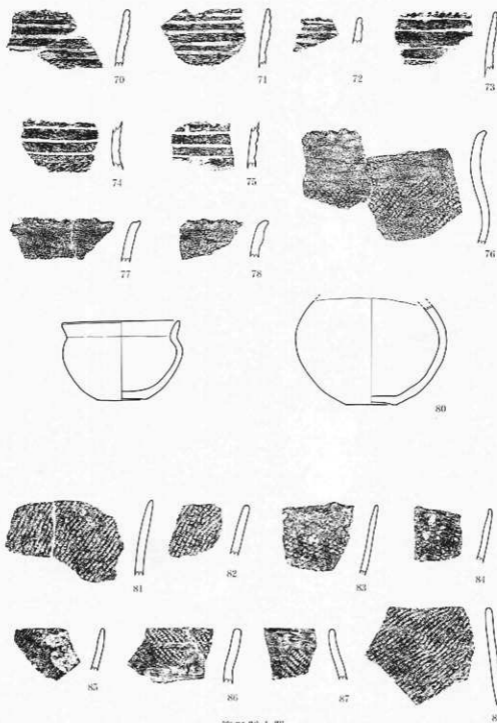


第 II 群土器

第14圖 第 I 群土器・第 II 群土器

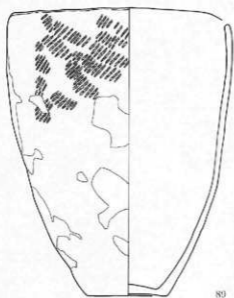


第15图 第三群土器



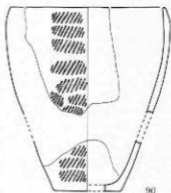
第IV群土器

第16图 第三群土器・第IV群土器



(S=1/1)

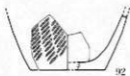
80



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



102



103



101



104



105

第17图 第IV群土器



106



107



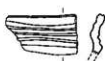
108



109



110



111



112



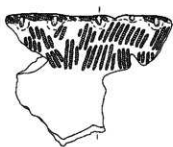
113



114



115



116



117



118



119



121



123

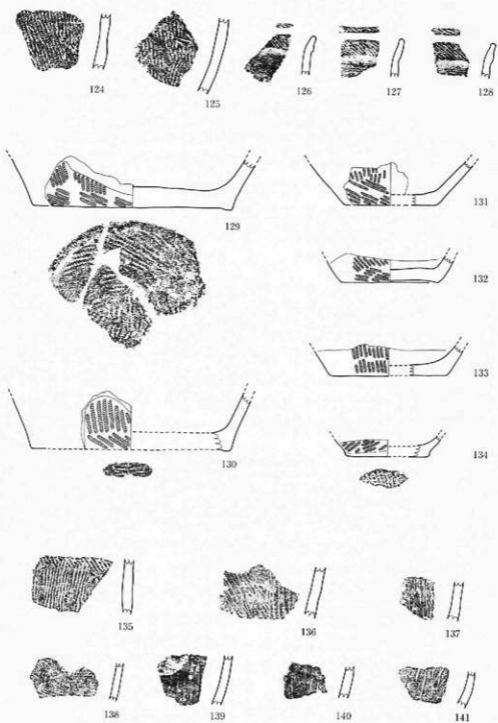


120



122

第18图 第V群土器



第19图 第V群土器

## ② 石器・石製品

遺構外から出土した石器は、石鏃、尖頭器、石匙、石篋、搔・削器類、不定形石器などの剥片石器61点と、石斧、磨石・敲石類、凹石、石皿、石錘などの礫石器31点であり、石製品は碧玉など4点である。

### 石鏃（第20図、写真図版11）

10点の出土である。9～15は中茎を有しないもので、基部の形状から2種類に分類される。9～11は基部が直状の平基無茎鏃で、形状は二等辺三角形を呈し、薄手である。いずれも両面からの二次調整が施され、11は側辺の一部が欠損している。12～15は基部に挾入を有する凹基無茎鏃で、12～14は挾入が浅く、15はやや深く基部が全体に緩い弧状を呈する。いずれも両面からの二次調整が施される。16～18は中茎を有し、16・17は平基有茎鏃で身部の形状は二等辺三角形を呈する。17は中茎の一部が欠損している。18は先端部および基部の一部が欠損しているが、所謂凸基有茎鏃で両面からの粗い二次調整が施される。

### 尖頭器（第20図、写真図版11）

4点の出土である。19・20は木葉形を呈し、基部は丸味をおびる。肉厚で両面からの粗い二次調整が施される。20は基部付近にタール状物質が付着している。21は形状が二等辺三角形を呈し、基部は直線的であるが、両端が丸味をおびる。両面から丁寧な二次調整が施される。22は槍先形を呈し、肉厚である。両面からの粗い二次調整が施されており、半製品のなものと考えられる。

### 石匙（第21図、写真図版11）

9点の出土である。23～29は縦型石匙、23～26は片面からの二次調整で刃部が形成されるものである。24・25は1側縁に直状の刃部、他の側縁には凸状の刃部が形成され、25はつまみ部が欠損している。23・26は両側縁に凸状の刃部が形成され、26は端部にも直状の刃部が形成される。27～29は両面からの二次調整によって刃部が形成される。27は1側縁に片面調整によって直状の刃部が形成され、他の側縁には両面調整により凸状の刃部が形成される。つまみ部は欠損している。28・29は両面調整によって1側縁が直状、他の側縁に凸状の刃部が形成され、29は先端部が欠損している。30・31は横型石匙で両面からの二次調整により30が直状、31は凸状の刃部が形成される。

### 石篋（第22図、写真図版12）

6点の出土である。32は片面からの二次調整、33～35は片面からの二次調整を主体として部

分的な両面調整で刃部が形成される。36は1側縁が両面からの二次調整、37は両側縁に両面からの二次調整が施され、刃部が形成される。32～35は片刃、36・37は両刃である。

#### 種・削器類 (第22・23図、写真図版12・13)

不定形な剥片の縁辺に二次調整によって急角度の刃部が形成されるものを一括した。13点の出土である。38～42は楕円形または円形を基調とする剥片で、縁辺の一部を除くほぼ全縁に片面からの二次調整によって刃部が形成されており、ラウンド・スクレイパー状のものである。43～46は不定形な剥片の縁辺に、片面からの二次調整によって弧状の刃部が形成されており、エンド・スクレイパー状のものである。47～50は長形状の剥片の側縁に、片面からの二次調整によって直状の刃部が形成されており、サイド・スクレイパー状である。

#### 不定形石器 (第24・25図、写真図版13・14)

不定形な剥片の一部に二次調整が施されるものを一括した。19点の出土である。51は1側縁に片面からの二次調整が施され、一部にノッチ状の刃部を有する。52～57は剥片の2辺に二次調整が施される。52～55は両片面からの二次調整が施され、56・57は片面からの二次調整と部分的な両面調整が施される。58～65は剥片の1辺に二次調整が施され、58・60～64は片面からの二次調整、59・65は両面からの二次調整が施される。66・67は剥片の端部に片面からの二次調整が施される。68・69は縦長な剥片の端部と1側縁に二次調整が施され、68は片面から、69は両片面からの二次調整が施される。

#### 石斧 (第26図、写真図版14)

8点の出土である。70～74は打製石斧である。70～73は両面調整が施され、70・72は一部に自然面が残る。73・74は刃部が欠損し、74は裏面が剥落して詳細は不明である。75～77は磨製石斧である。75はほぼ完形で小型のものである。全面がよく研磨され、刃部両凸刃で円刃である。76は頭部が欠損し、77は刃部の残存である。いずれもよく研磨され、側縁の後縁は比較的明瞭である。刃部はいずれも両凸刃で円刃である。

#### 磨石・敲石類 (第27～29図、写真図版14・15)

磨痕、擦痕、敲打痕を有するが、単独の使用痕を有するものは少なく、使用痕の重複も多いことから一括した。「擦る、敲き潰す」という機能を有するものと考えられる。78～89は三角柱状の礫の後部に、棒状または偏平楕円形状の礫の後部や周縁に擦痕や敲打痕を有する所謂「棒状擦石」「特殊磨石」などと呼ばれているものである。78～86は三角柱状の礫の1後部に擦痕や敲打痕が認められる。80・83・84・86は幅1cm前後の比較的細長い使用痕があり、78・



79・81・82・85は幅2cm前後でやや広い使用痕がある。78～80は使用面の周辺の剥落が顕著である。87は偏平楕円形状の礫の周縁の一部に細長い使用痕を有し、88・89は棒状の礫の1稜部に細長い使用痕が認められる。90は円礫の周縁一部に擦痕を有し、91は偏平な円礫の表裏両面に擦痕が認められる。92・93は偏平な礫が用いられ、92は両端部に、93は周縁の一部に各々敲打痕が認められる。

#### 凹石（第29図、写真図版15）

2点の出土である。94は偏平な円礫の表面に連続する2カ所の凹みがあり、95は棒状の礫の1面に2カ所の浅い凹みが認められる。

#### 石皿（第29・30図、写真図版16）

2点の出土である。96は低い縁が作り出されるもので、使用面はほぼ平坦でざらざらする。97は使用面が浅く凹み、若干凹凸はあるが滑らかである。

#### 石錘（第30図、写真図版16）

98の1点である。偏平な重円礫の上下両端が打ち欠かれ、2個一對の挾入部が作り出される。

#### 石棒（第30図、写真図版16）

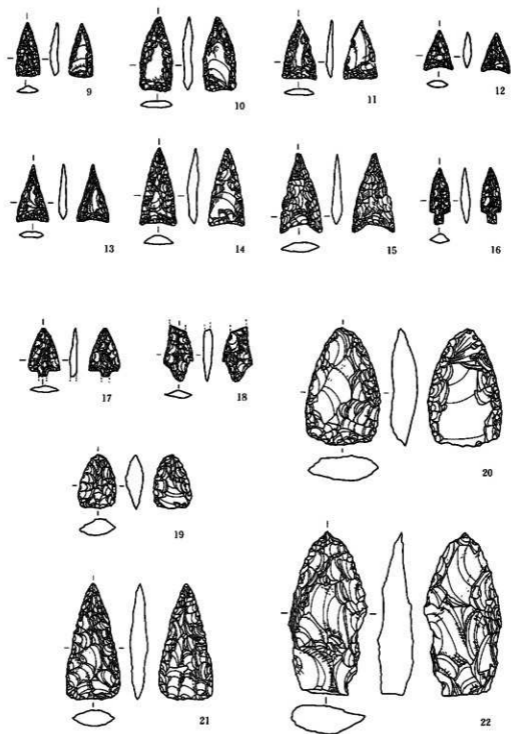
99の1点である。長さは47.6cm、両端部は丸味をおびる。石材はディサイトである。

#### 磨滅痕を有する礫（第30図、写真図版16）

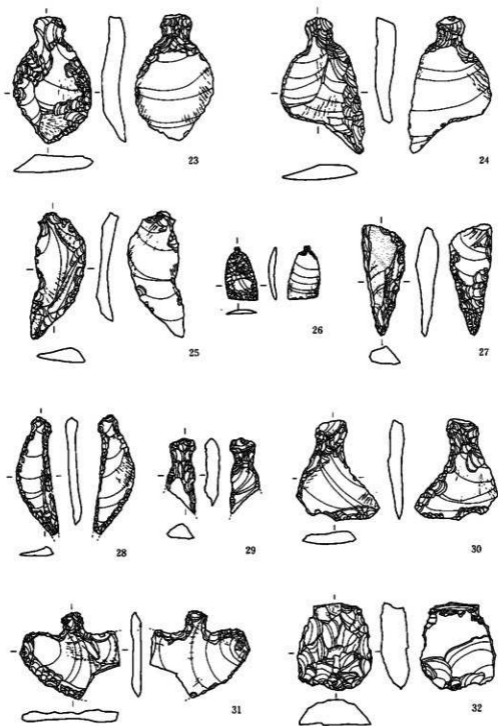
100の1点である。棒状の礫の表裏両面の中央部が槌状に浅く凹み、若干磨滅している。砥石的な機能をもつ礫の可能性はある。

#### 石製品（第30図、写真図版16）

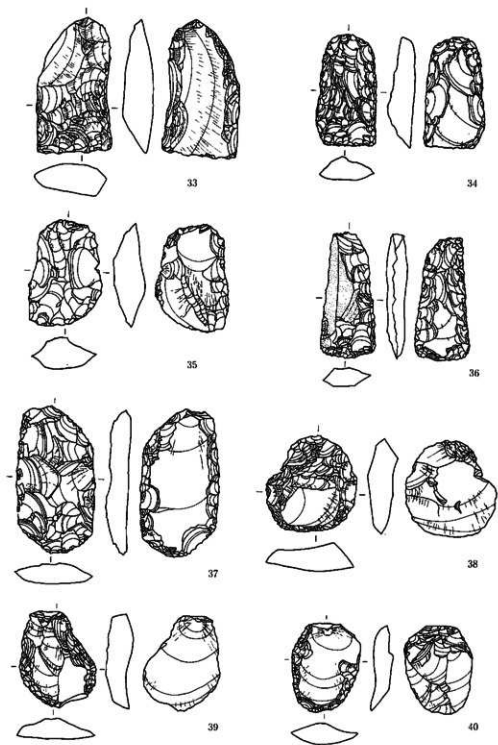
101は滑石製の管玉である。長さ5cm、径1.5cmで、径5mmの孔が両端から穿たれている。102・103は板状を呈する。102は一部欠損しているが、ほぼ方形に整形され、縁取りは比較的丁寧である。103は三角形に整形されるものである。104は偏平な楕円形状の自然礫に溝状の沈線が2条施されている。102～104の用途等については不明である。



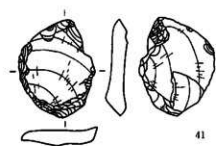
第20圖 石器(1)



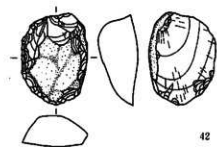
第21圖 石器(2)



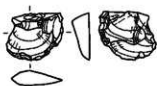
第22圖 石器(3)



41



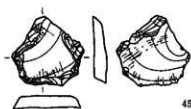
42



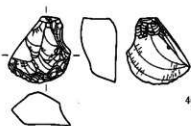
43



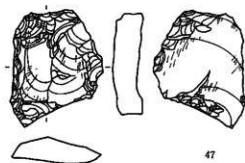
44



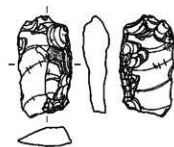
45



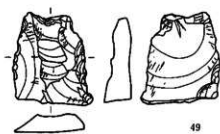
46



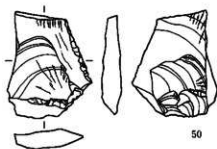
47



48

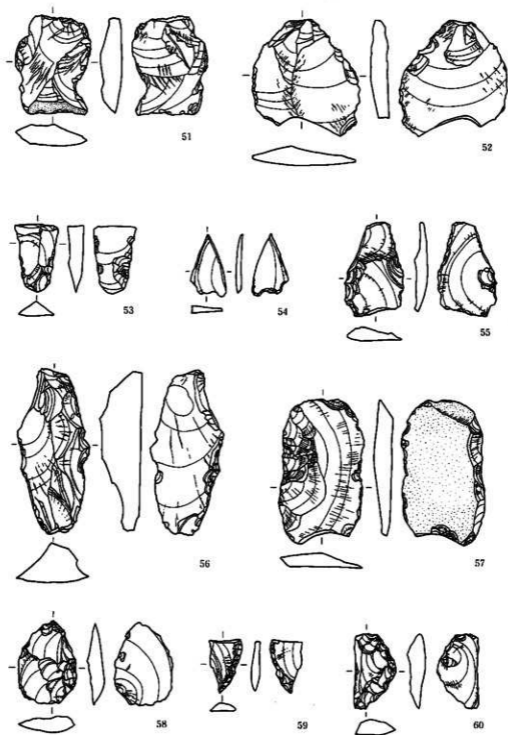


49

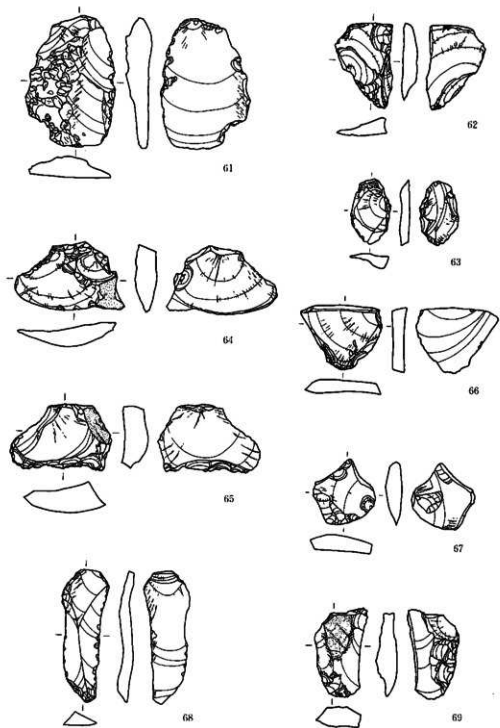


50

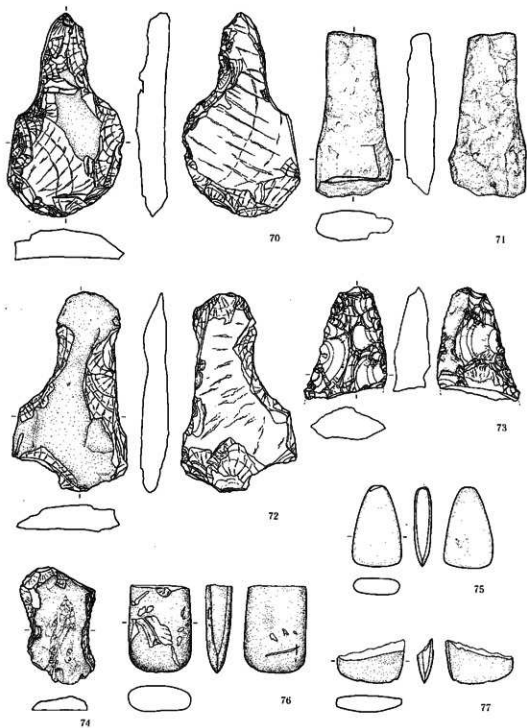
第23图 石器(4)



第24图 石器(5)

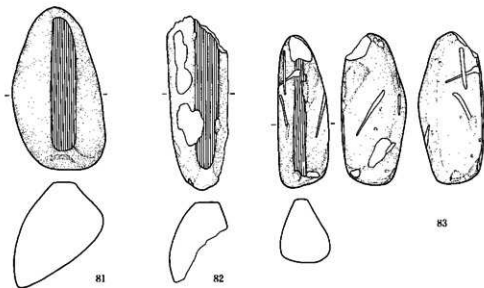
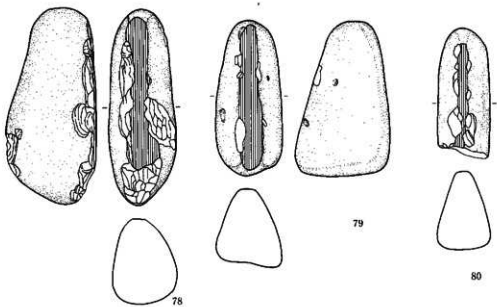


第25图 石器(6)

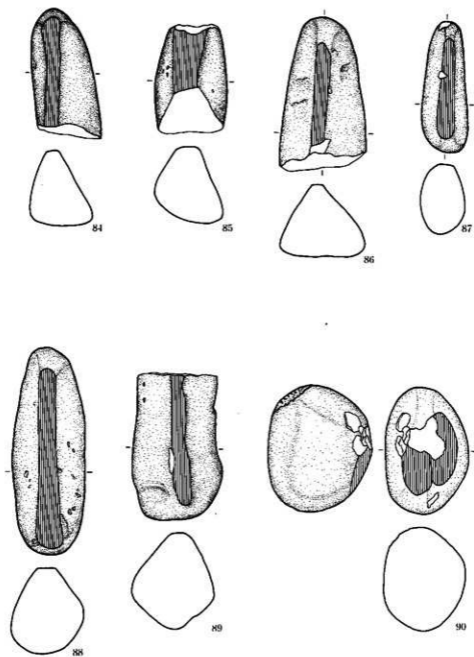


第26圖 石器(7)

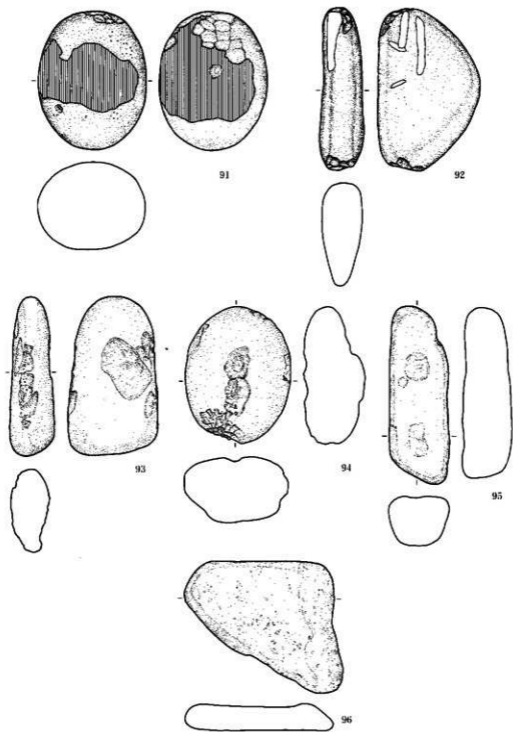




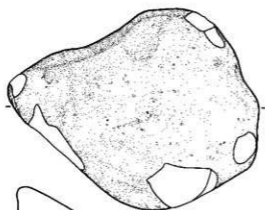
第27圖 石器(8)



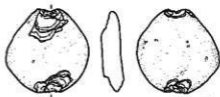
第28圖 石器(9)



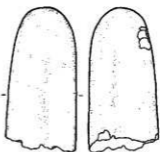
第29圖 石器(10)



97



98



100



99



101



102



103



104

第30图 石器(11)

## (2) 古代～中世の遺物

### ① 土師器・須恵器 (第34図、写真図版18)

平安時代に属すると考えられる土師器3点、須恵器2点の出土である。142～144は土師器であり、142・143はロクロ不使用の甕の口縁部片である。いずれも口縁部は緩く短く外反し、器面調整は口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面にはヘラケズリ、体部内面にはヘラナデが施される。144はロクロ形成の坏の底部片である。底部切り離しは回転糸切りで、底部外面の再調整はみられない。145・146は須恵器甕の体部片で、145は体部外面に叩き目が施される。

### ② 石器・石製品

#### 砥石 (第31～34図、写真図版17・18)

細片で図化しないものもあり、掲載したのは23点である。大半は自然礫の周縁に1～3面の使用痕を有するものであるが、105～107・110～112・114・116・117には整形痕も認められる。全般的に使用面は滑沢なものが多い。105・106は形状が立方体に近いもので、105のおもな使用面は2面である。1面は凹状に弯曲し、他の1面には比較的彫りの深い線条痕が認められる。106は3面に整形痕と使用痕が認められる。107・108・110・111・113～116・123はおもな使用面が2面である。109は3面に使用痕が認められ、112・117～122・124～127は1面に使用痕が認められる。石材は淡緑色細粒凝灰岩が14点と最も多く、緑色凝灰岩4点、変質輝石安山岩2点、デイサイト、デイサイト質凝灰岩、泥質細粒凝灰岩が各々1点である。

#### 硯 (第34図、写真図版18)

128の1点である。海部に近い陸部の破片である。表裏両面に掘り込みをもつが、細片で詳細は不明である。石材は流紋岩質細粒凝灰岩である。

### ③ 陶器 (第34図、写真図版18)

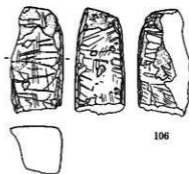
147・148は淡緑色釉が施釉された皿の破片である。美濃産で時期は16世紀に比定される。

### ④ 金属製品 (第34図、写真図版18)

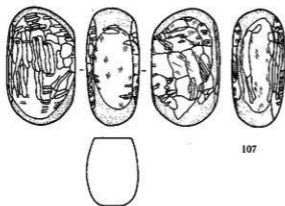
3の1点である。径1.2cmの鉛製の弾丸である。



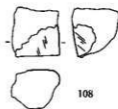
105



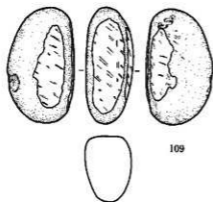
106



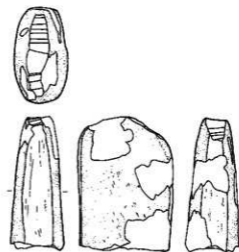
107



108

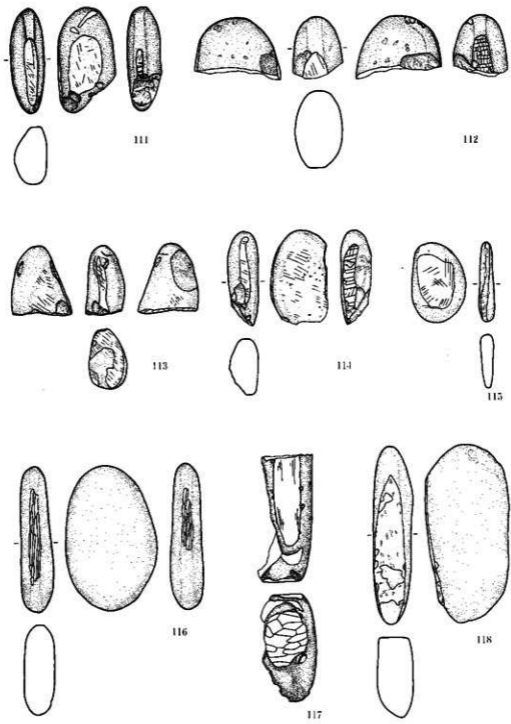


109

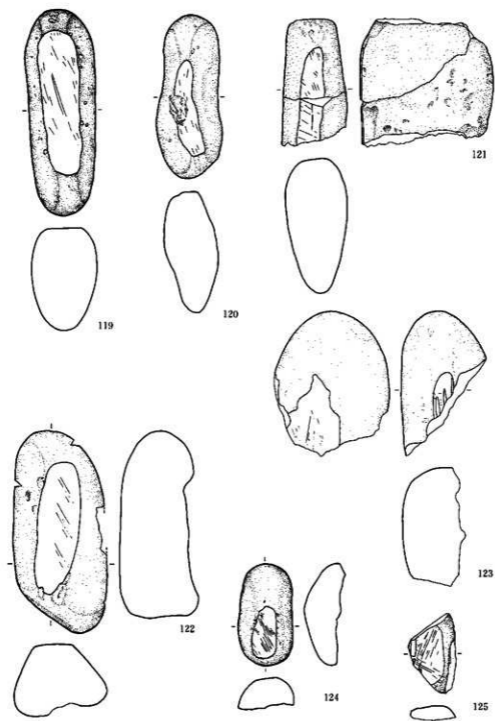


110

第31圖 磁石 (1)

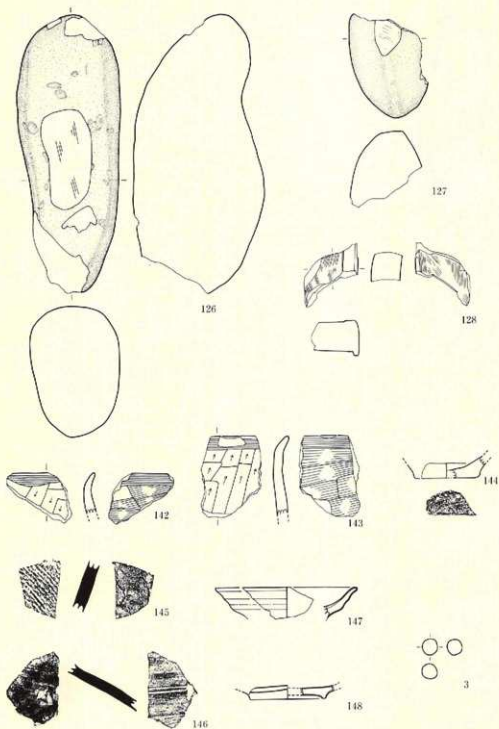


第32圖 磁石(2)



第33圖 磁石(3)





第34图 砥石(4)・石製品・土師器・須惠器・陶器・金属製品

第2表 石器・石製品一覧表(1)

登録番号	器種	出土地点	法量				石材・産地・生成年代	掲載番号
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
1	石 鏃	Ⅲ J 15 区	2.1	1.5	1.4	0.8	流紋岩・奥羽山地・中新統	12
2	石 鏃	Ⅲ I 08 区	4.1	1.9	5.1	3.0	流紋岩・奥羽山地・中新統	14
3	石 鏃	Ⅳ A 10 区	3.9	1.7	0.5	3.0	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	10
4	石 鏃	Ⅰ F 15 区	2.8	1.3	0.4	1.1	流紋岩・奥羽山地・中新統	9
5	石 鏃	Ⅲ C 04 区	3.1	1.8	0.3	1.6	粘板岩・夏油川上流・古生界	11
6	石 鏃	Ⅳ E 08 区	3.0	1.7	0.4	1.4	流紋岩・奥羽山地・中新統	13
7	石 鏃	Ⅳ C 07 区	2.6	1.7	0.4	1.2	輝綠凝灰岩・北上山地・古生界	17
8	石 鏃	Ⅱ C 13 区	(2.9)	1.6	0.5	1.3	流紋岩・奥羽山地・中新統	18
9	石 鏃	Ⅳ D 12 区	3.0	1.1	0.5	1.1	粘板岩・夏油川上流・古生界	16
10	石 匙	Ⅳ I 05 区	6.7	4.1	1.3	25.5	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	23
11	石 匙	Ⅳ B 18 区	7.3	4.1	1.0	19.8	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	24
12	石 匙	Ⅳ A 13 区	2.8	1.7	0.4	1.1	流紋岩・奥羽山地・中新統	26
13	石 匙	Ⅳ B 11 区	(6.3)	2.2	0.7	48	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	28
14	石 匙	Ⅳ A 08 区	5.4	(4.4)	0.8	12.6	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	30
15	石 匙	Ⅳ C 11 区	(6.7)	3.0	1.2	14.0	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	25
16	石 匙	Ⅳ C 13 区	(5.9)	2.3	1.2	12.3	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	27
17	石 匙	Ⅳ C 11 区	(4.6)	(5.3)	0.7	13.3	流紋岩・奥羽山地・中新統	31
18	石 匙	Ⅳ C 11 区					17と接合	
19	石 匙	Ⅳ B 11 区	(4.0)	1.6	0.8	3.5	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	29
20	石 匙	Ⅳ D 04 区	5.9	3.2	1.4	24.4	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	34
21	石 匙	Ⅳ C 13 区	6.6	2.9	1.1	23.0	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	36
22	石 匙	Ⅱ A 13 区	5.6	3.9	1.7	35.4	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	35
23	石 匙	Ⅲ ~ Ⅳ 区	(4.6)	3.9	1.4	32.5	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	32
24	石 匙	Ⅰ G 15 区	7.8	4.2	1.2	45.2	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	37
25	掻・削器	Ⅳ C 11 区	5.2	4.0	1.1	21.2	チャート・北上山地・古生界	41
26	掻・削器	Ⅲ H 07 区	6.2	4.9	1.6	41.7	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	47
27	不定形石器	Ⅲ G 08 区	3.6	2.3	0.8	5.7	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	53
28	掻・削器	Ⅳ B 12 区	4.3	4.4	2.0	38.2	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	42
29	掻・削器	Ⅰ F 20 区	2.5	3.0	0.9	6.3	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	43
30	掻・削器	Ⅳ C 11 区	5.1	4.8	1.5	37.2	チャート・北上山地・古生界	38
31	掻・削器	Ⅰ F 20 区	5.1	4.1	1.4	24.2	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	39
32	掻・削器	Ⅲ F 06 区	3.7	3.8	0.7	11.4	輝綠凝灰岩・北上山地・古生界45	45
33	掻・削器	Ⅰ F 20 区	2.7	2.3	0.9	5.4	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	44
34	掻・削器	Ⅱ B 13 区	4.7	3.6	1.1	17.9	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	40
35	掻・削器	Ⅳ C 11 区	3.5	3.3	1.7	21.8	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	46
36	不定形石器	Ⅳ C 11 区	3.4	4.4	0.8	13.2	チャート・北上山地・古生界	66
37	不定形石器	Ⅲ I 05 区	5.2	4.0	1.2	28.1	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	51
38	不定形石器	Ⅲ B05清跡埋土	3.9	1.3	0.5	1.9	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	8
39	刮片	Ⅳ C 11 区	2.7	2.5	0.9	7.0	チャート・奥羽山地・古生界	
40	尖頭器	Ⅳ D 15 区	2.9	2.0	0.9	4.1	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	19
41	尖頭器	Ⅲ ~ Ⅳ 区	6.2	2.9	0.9	12.2	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	21
42	不定形石器	Ⅲ H 07 区	4.5	3.2	0.9	11.3	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	58
43	尖頭器	Ⅳ 区	8.8	4.1	1.6	52.8	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	22
44	尖頭器	Ⅲ C 12 区	6.2	4.0	1.4	35.6	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	20
45	打製石斧	Ⅰ J 12 区	(9.1)	6.5	3.3	140.0	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	73
46	不定形石器	Ⅳ D 11 区	2.8	1.7	0.4	2.3	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	59
47	不定形石器	Ⅲ J 11 区	6.9	4.7	1.4	36.7	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	61
48	不定形石器	Ⅳ D 12 区	7.0	2.5	0.8	10.8	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	68

第3表 石器・石製品一覽表(2)

登録番号	器種	出土地点	法量				石材・産地・生成年代	掲載番号
			長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)		
49	不定形石器	Ⅱ 区	6.2	5.7	1.0	30.8	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	52
50	不定形石器	I G 13区	3.5	3.3	0.9	10.9	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	67
51	剥片	I J 12区	3.3	3.2	1.1	12.1	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	
52	掻・削器	I J 12区	4.9	4.2	1.4	27.5	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	49
53	不定形石器	Ⅳ C 11区	3.4	2.1	0.8	4.1	チャート・北上山地・古生界	63
54	不定形石器	Ⅲ J 05区	4.5	3.1	0.8	9.9	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	62
55	不定形石器	Ⅲ E 06区	4.0	2.2	1.0	6.2	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	60
56	掻・削器	Ⅲ C 04区	5.4	2.8	1.4	20.9	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	48
57	不定形石器	Ⅲ J 05区	3.3	1.9	0.3	1.6	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	54
58	不定形石器	Ⅳ A 10区	5.0	3.1	0.7	10.4	粘板岩・夏油川上流・古生界	55
59	不定形石器	Ⅲ J 03区	3.6	5.8	1.1	16.4	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	64
60	掻・削器	Ⅳ D 10区	5.7	4.5	1.1	29.2	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	50
61	不定形石器	Ⅲ F 06区	4.7	2.8	1.1	15.3	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	69
62	不定形石器	Ⅲ G 05区	3.5	5.3	1.6	26.6	硬質泥岩・奥羽山地・中新統	65
63	不定形石器	Ⅲ G 05区	8.9	3.8	2.2	53.2	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	56
64	石鏃	Ⅲ F 10区	6.8	6.7	1.8	100.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	98
65~67	欠番							
68	板状石製品	Ⅲ F 05区	(2.7)	2.7	0.9	6.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	102
69	管玉	Ⅳ C 17区	5.0	1.5	1.5	17.0	滑石・北上山地(宮守付近)・古生界	101
70	不明石製品	Ⅲ I 06区	5.2	2.8	1.3	19.9	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	104
71	硯	Ⅲ F 08区	(5.1)	(4.4)	2.8	36.2	流紋岩質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	128
72	磨製石斧	Ⅲ F 05区	(7.0)	5.0	2.1	140.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	76
73	磨製石斧	Ⅳ A 13区	(3.5)	(5.4)	1.3	28.9	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	77
74	打製石斧	Ⅲ H 12区	16.3	(9.3)	2.4	400.0	流紋岩・奥羽山地・中新統	70
75	打製石斧	Ⅲ H 10区	(16.0)	9.3	2.2	310.0	流紋岩・奥羽山地・中新統	72
76	打製石斧	Ⅲ C 02区	13.4	6.2	2.5	290.0	ホルンフェルス・夏油川上流・古生界	71
77	打製石斧	Ⅳ C 14区	(9.4)	6.5	1.2	70.0	ホルンフェルス・夏油川上流・古生界	74
78	砥石	Ⅲ B 5溝跡埋土	6.8	2.6	3.7	75.0	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	2
79	砥石	Ⅲ E 05区	7.5	3.2	2.8	100.0	泥質細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	105
80	砥石	Ⅳ C 11区	(3.9)	(3.8)	(3.1)	55.1	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	108
81	砥石	Ⅲ F 17区	10.4	4.2	5.5	320.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	107
82	砥石	Ⅲ F 08区	9.3	3.8	5.3	210.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	109
83	砥石	Ⅲ B 5溝跡埋土	(9.4)	(3.7)	5.0	160.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	1
84	砥石	Ⅳ A 11区	(10.7)	4.4	7.5	400.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	110
85	磨・敲石	Ⅳ C 14区	11.1	8.6	7.0	990.0	デイスait・奥羽山地・(前塚見山)・中新統	91
86	磨・敲石	Ⅲ E 11区	(8.3)	5.8	6.3	380.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	85
87	磨・敲石	I G 12区	12.4	5.3	6.3	630.0	デイスait・奥羽山地・(前塚見山)・中新統	79
88	磨・敲石	I G 12区	15.6	5.4	6.8	830.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	78
89	磨・敲石	I J 12区	(11.8)	7.2	7.7	1000.0	デイスait・奥羽山地・(前塚見山)・中新統	89
90	磨・敲石	I J 14区	(10.4)	5.7	6.0	390.0	デイスait・奥羽山地・(前塚見山)・中新統	84
91	磨・敲石	I J 13区	13.0	7.4	8.3	870.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	81
92	砥石	Ⅲ F 08区	16.5	5.6	8.6	1000.0	デイスait質凝灰岩・奥羽山地・中新統	119
93	欠番							
94	磨・敲石	I J 13区	(13.9)	(4.9)	(6.4)	370.0	変質輝石安岩山・奥羽山地・中新統	82
95	砥石	Ⅳ C 13区	(10.1)	(5.2)	(10.7)	670.0	変質輝石安岩山・奥羽山地・中新統	121
96	磨・敲石	I J 13区	(10.4)	(4.2)	(6.2)	390.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	80
97	磨・敲石	Ⅳ B 12区	10.2	6.7	8.3	790.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	90
98	欠番							

第4表 石器・石製品一覧表(3)

登録番号	器種	出土地点	法量				石材・産地・生成年代	掲載番号
			長さ	幅	厚さ	重量		
99	砥石	Ⅲ H 0 8 区	13.0	5.3	9.7	760.0	変質輝石安山岩・奥羽山地・中新統	120
100	磨・蔽石	Ⅳ A 0 5 区	12.7	3.6	7.2	470.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	93
101	磨・蔽石	Ⅳ D 1 3 区	13.0	3.6	8.2	550.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	92
102	欠番							
103	凹石	Ⅲ B05清跡埋土	12.7	7.8	4.4	520.0	変質輝石安山岩・奥羽山地・中新統	3
104	凹石	Ⅲ H 0 8 区	11.0	8.5	5.3	610.0	両輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	94
105	凹石	Ⅲ B05清跡埋土	11.1	8.2	3.6	470.0	両輝石安山岩・奥羽山地・新第三系	4
106	石	Ⅲ B05清跡埋土	15.5	18.7	3.9	1140.0	変質輝石安山岩・奥羽山地・中新統	5
107	石	Ⅲ D 0 4 区	10.5	12.8	2.2	340.0	変質輝石安山岩・奥羽山地・中新統	96
108	石	Ⅲ 区	21.6	26.9	9.6	4660.0	変質輝石安山岩・奥羽山地・中新統	97
109	砥石	Ⅲ B05清跡埋土	(10.8)	(2.9)	(5.6)	150.0	デイサイト・奥羽山地(脚塚見山)・中新統	6
110	砥石	Ⅲ B05清跡埋土	(9.4)	(4.7)	(3.0)	100.0	細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	7
111	砥石	Ⅲ B 0 5 区	8.4	4.4	(2.6)	130.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	124
112	欠番							
113	砥石	Ⅲ G 0 8 区	6.3	1.3	4.3	35.9	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	115
114	砥石	Ⅳ D 1 3 区	(7.5)	2.5	4.5	100.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	114
115	欠番							
116	砥石	Ⅲ F 0 5 区	8.4	2.7	4.5	130.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	111
117	砥石	Ⅲ I 0 8 区	(6.5)	(3.8)	(1.2)	26.3	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	125
118	砥石	Ⅲ F 0 7 区	5.5	3.2	4.8	100.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	113
119	砥石	Ⅲ F 0 8 区	(4.9)	4.0	6.1	150.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	112
120	磨滅痕ある磨	Ⅳ D 1 0 区	(7.5)	(4.3)	(1.2)	35.4	デイサイト・奥羽山地(脚塚見山)・中新統	
121	板状石製品	Ⅳ A 1 2 区	6.0	5.9	2.0	70.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	103
122	砥石	Ⅳ D 1 0 区	(8.3)	(6.3)	(6.0)	340.0	デイサイト・奥羽山地(脚塚見山)・中新統	127
123	砥石	Ⅲ C 0 8 区	(11.6)	(6.7)	(9.5)	650.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	123
124	砥石	Ⅲ F 0 5 区	(8.5)	(4.0)	3.8	160.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	106
125	磨滅痕ある磨	Ⅳ A 1 1 区	(11.6)	5.7	3.6	370.0	デイサイト・奥羽山地(脚塚見山)・中新統	100
126	石	Ⅲ G 1 5 区	47.6	15.6	14.0	16.2	デイサイト・奥羽山地(脚塚見山)・中新統	99
127	砥石	Ⅳ A 1 2 区	14.2	6.7	3.3	410.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	118
128	凹石	Ⅳ D 1 3 区	14.3	4.8	3.9	390.0	デイサイト・奥羽山地(脚塚見山)・中新統	95
129	磨・蔽石	Ⅲ A 1 3 区	(12.4)	6.9	5.8	570.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	86
130	磨・蔽石	Ⅲ 区	16.7	5.8	6.9	830.0	デイサイト・奥羽山地(脚塚見山)・中新統	88
131	磨・蔽石	Ⅲ J 0 6 区	10.5	3.7	5.6	300.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	87
132	磨・蔽石	Ⅲ J 0 6 区	12.2	4.1	5.0	360.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	83
133	石	Ⅲ J 0 6 区	4.2	2.2	0.6	3.5	流紋岩・奥羽山地・中新統	15
134	石	Ⅲ J 1 1 区	7.2	4.1	1.6	49.3	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	33
135	砥石	Ⅳ D 1 2 区	(22.2)	8.3	10.5	2180.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	126
136	不定形石器	Ⅳ D 1 3 区	7.7	4.4	1.0	36.0	珪質泥岩・奥羽山地・中新統	57
137	砥石	Ⅳ D 1 3 区	11.6	2.7	7.2	280.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	116
138	磨製石斧	Ⅳ D 1 3 区	6.5	3.9	1.3	52.7	ホルンフェルス・夏油川上流・古生界	75
139	砥石	Ⅳ D 1 3 区	16.2	7.5	5.9	750.0	淡緑色細粒凝灰岩・奥羽山地・中新統	122
140	砥石	Ⅳ D 1 3 区	(10.2)	(4.6)	(8.1)	270.0	緑色凝灰岩・奥羽山地・中新統	117

## V ま と め

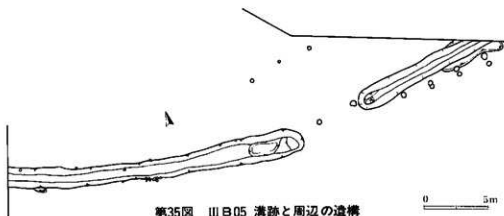
### 1 遺構

#### (1) III B05溝跡およびその周辺の遺構 (第35図)

III B05溝跡およびその周辺に位置するIII J04-1・2柱穴列や柱穴状小土坑群については、それぞれ個別に記述してきたが、これらの遺構は検出面が同一であることや、占地状況等からはほぼ同時期の存在で有機的な関連性をもつ遺構群と考えられる。また、遺構の時期については決定的な資料は得られていないが占地状況や、遺構の周辺域から出土している16世紀代に比定される陶器、硯および弾丸等の遺物等から考えて中世末戦国期に属する可能性が強い。

溝は2条で構成され、溝の全体の形状は出入口と考えられる部分が南側に張り出す弧状を呈し、2条の溝は南側に向かって「ハ」の字状となる。東側の溝は一部調査対象区外にのびており、全容は把握し得なかったが、西側の溝の例からみてその東端は段丘崖まで達するものと考えられる。この占地状況は溝によって台地が区切られる様相を呈し、溝によって区画される主体部は、溝の弯曲の状況からみて溝の北側、台地の突端部にあると考えられる。溝の深さは、西側の溝が20~40cm、東側の溝が40~50cmと比較的浅いが、これは上部が削平されていることが考えられる。溝の埋土や底面の状況からは滞水していた痕跡は認められず、所謂空欄的な性格のものとして推定される。また、この溝に土壘状のものが伴っていたかどうかについては確実な資料は得られていない。しかし、埋土に多量の礫が混入していることから、積石を伴う土壘があったことも考えられるが、推測の域をでるものではない。

東側の溝に沿ってその南側に柱穴列が2列存在するが、作り替えと考えられ、北側に位置するものの方が新しい。これらは各々4柱穴一連のものであり、さらに延びるものとは考えられ



ない。4柱穴のみで溝に区画された主体部の外側に位置していることから、橋列的なものとは考えられず、例えば馬つなぎのような施設の可能性が考えられる。また、溝の周辺から柱穴状小土坑が検出されているが、出入口部分に並列する2基は浅いものの配置状況からは門跡とも推測される。また、北端部に位置する3基は、出入口部分に平行する配置状況を呈し、葎の塀のような施設の可能性が考えられる。

これらの遺構によって区画された台地の突端部の性格については、大部分が調査区外となっていることから推測の域をでるものではないが、障場的な性格のものか、または物見櫓的な施設が存在等も考えられ、遺跡の東方0.6kmに位置する岩崎城との関連性が考えられる。

## (2) その他の遺構

IVD11炭痕跡は白炭生産に関わる遺構と考えられる。遺構の時期は、埴土から平安時代の土師器坏の破片が出土しているが、決定的な資料に欠け不明である。IVD16溝跡および位置F15焼土については、出土遺物がなく周辺の状況からも遺構の時期や性格を決定する資料は得られず不明である。

## 2 遺物

遺物は量は少ないものの、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、石器・石製品、金属製品等が出土している。これらのうちで、土器の大半を占める縄文土器を中心に若干記すこととする。

第I群土器は縄文時代前期に位置づけられ、1・2類土器は胎土に繊維が混入しており、ほぼ前期初頭～前葉に属するものと考えられる。1類土器は器形が尖底に近いものと推定され、口唇部に刻み目をもつこと等、早稲田6類に類似する特徴をもつ。2類土器は羽状縄文が施され、ほぼ大木1式に併行するものであろう。3類土器は胎土に繊維が混入しS字状連鎖沈文が施されることから、前期前葉の大木2b式に相当する。4類土器は器形や沈線文の特徴等から、ほぼ前期後葉の大木6式に相当するものと考えられる。

第II群土器は縄文時代後期に位置づけられるものであるが、器形や縦横の隆帯による区画、隆帯上の刺突列等の特徴からほぼ後期初頭～前葉に属するものと考えられる。

第III群土器は縄文時代晩期に位置づけられる。1類土器は三叉文等の文様の特徴から、晩期前葉の大洞B式に相当する。2類土器は口縁部に平行沈線文と刺突文が施される跡で、3類土器は口縁部に数条の平行沈線文が施される深鉢である。これらは文様等の特徴から晩期中葉の大洞C<sub>2</sub>式に相当しよう。4類土器は口唇部に指頭圧痕状の刻み目が施され、口縁部が無文となり、器形・文様等からほぼ2・3類土器に併行するものと考えられる。

第V群土器は弥生時代に位置づけられるものであるが、1類土器は変形工字文が施される小

型変形土器や、沈線によって文様が施される浅鉢または高坏形土器で、これらは器形や文様等から、中期前半の谷起鳥式に相当しよう。2類土器は縄文施文の特徴や口縁部形態および口縁部の刺突、捻糸文等の特徴から1類土器よりは時期が下がり、ほぼ弥生時代中期末葉から後期に属するものと考えられる。

このほか数点ではあるが、平安時代に属する土師器や須恵器が出土している。縄文土器をはじめとする土器はほぼ遺跡全体に散布し、縄文時代に属する石器類も出土している。しかし、縄文～弥生時代、平安時代に属すると考えられる住居跡等の遺構が発見されなかったことから、該期の集落は調査区外の削平された南側に存在した可能性がある。

#### 引用・参考文献

- 「土地分類基本調査 北上」 岩手県企画開発室1975  
和賀町文化財報告書第18集「和賀町内遺跡分布調査報告書Ⅰ」 和賀町教育委員会 1989  
「和賀町史」 和賀町 1977  
「長沼古墳」 和賀町教育委員会 1978  
「猫谷地・五条丸古墳群」(増補再刊) 江釣子村教育委員会 1978  
岩手県文化財調査報告書第53集「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」 岩手県教育委員会 1978  
岩手県文化財調査報告書第58集「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」 岩手県教育委員会 1981  
岩手県文化財調査報告書第70集「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅤ」 岩手県教育委員会 1982  
岩手県文化財調査報告書第72集「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ」 岩手県教育委員会 1982  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第91集「新平遺跡発掘調査報告書」 1985  
「谷起鳥遺跡第一次発掘調査報告書」 一関市教育委員会 1977  
橋 善光 「弥生土器・北東北1～4」(考古学ジャーナル160、162、166、168号所収) ニューサイエンス社 1979  
鈴木道之助 「図録石器の基礎知識Ⅲ」 柏書房  
岩手県教育委員会「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第147集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」(平成元年度分) 1990

写 真 图 版





遺跡近景(調査前、東から)



遺跡航空写真(調査終了後)

写真図版1 遺跡航空写真等



基本土層



全景



礫等出土状況



埋土断面

III B05 溝跡 (溝A)

写真図版2 基本土層・遺構(1)



全景



埋等出土状況

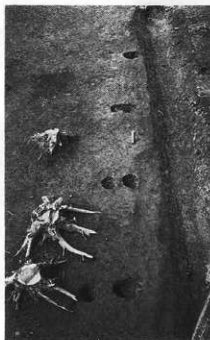


埋土断面

Ⅲ B05 溝跡 (溝B)



Ⅲ B05 溝跡全景



Ⅲ J04-1・2 柱穴列全景

写真図版3 遺構(2)

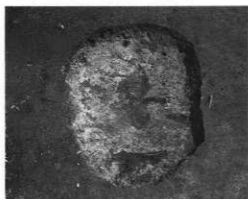


全 景



埋土断面

Ⅳ D16 溝跡

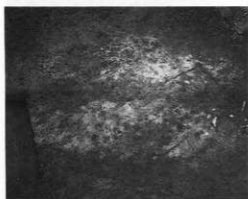


全 景



埋土断面

Ⅳ D11 炭窯跡



全 景



断 面

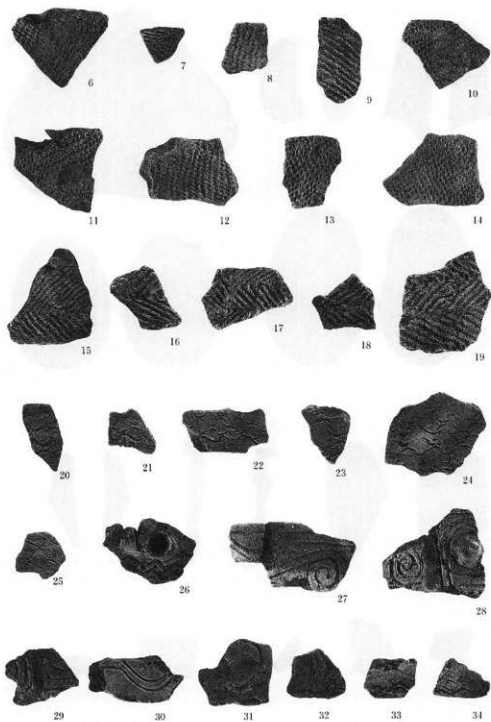
Ⅰ F15 焼土



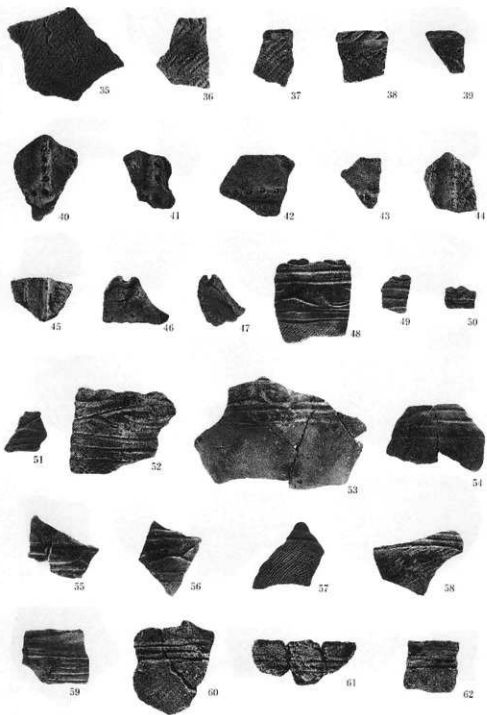
III B05 清跡

IV D11 炭窯跡

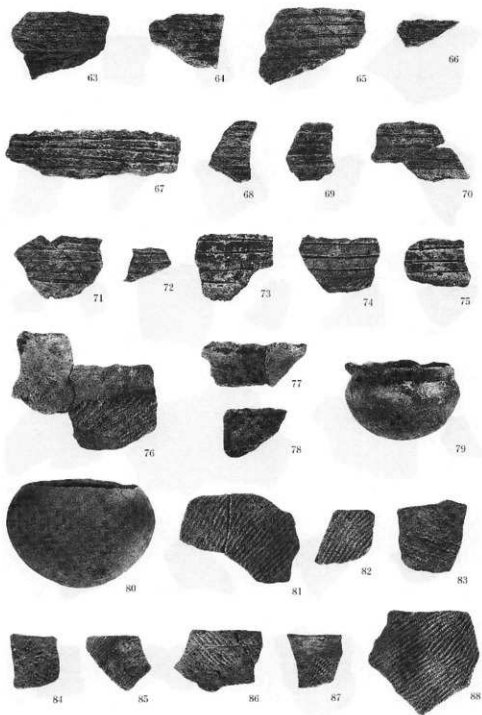
写真図版5 遺構内出土遺物



写真図版6 縄文土器(1)

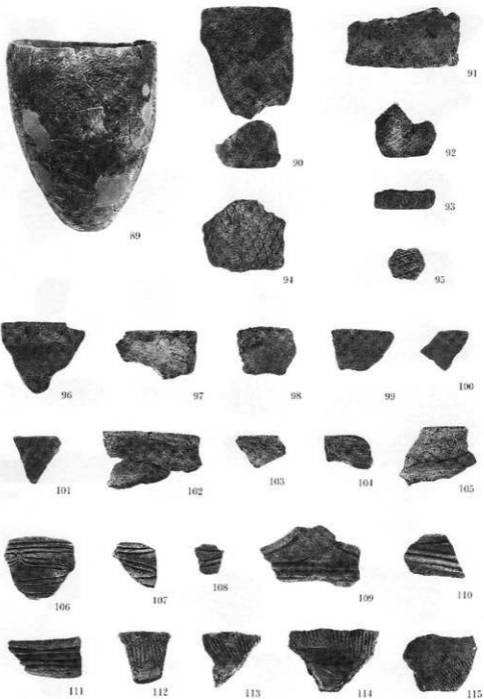


写真図版7 縄文土器(2)

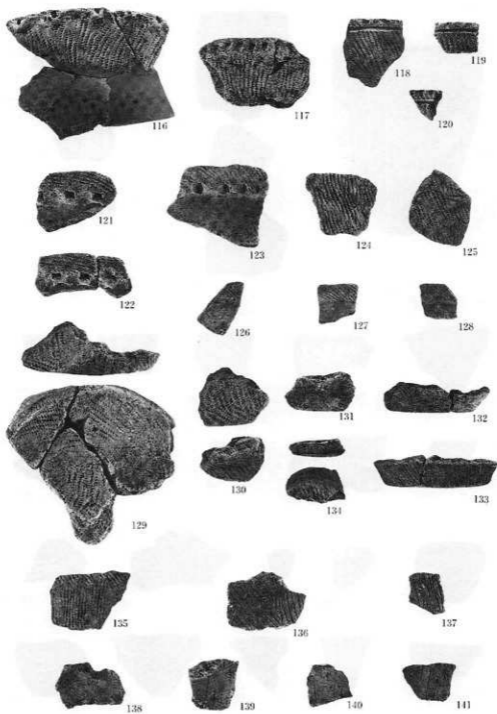


写真図版8 縄文土器(3)

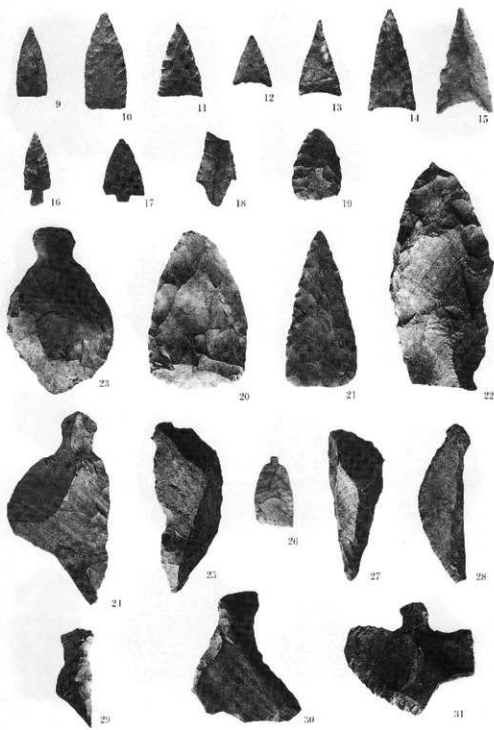




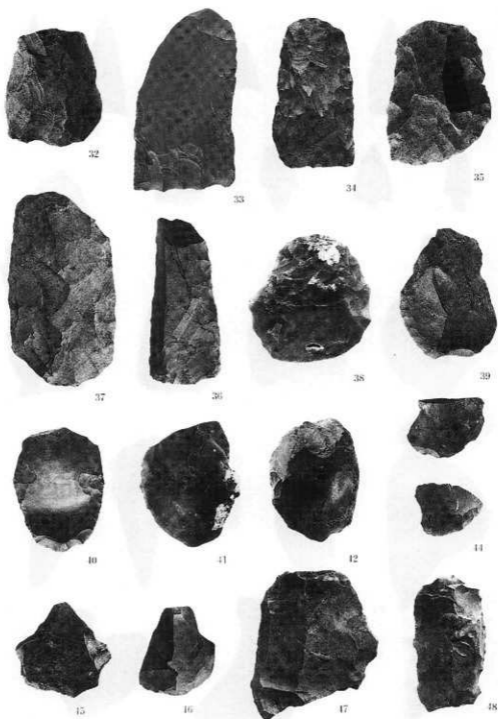
写真図版9 縄文土器(4)・弥生土器(1)



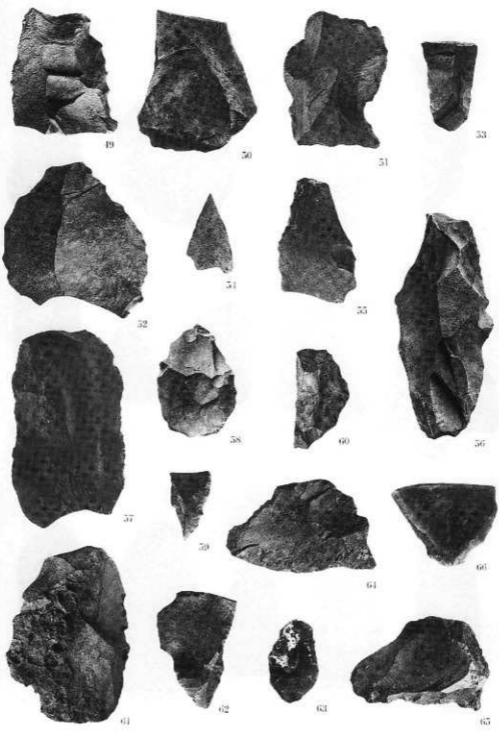
写真図版10 弥生土器(2)



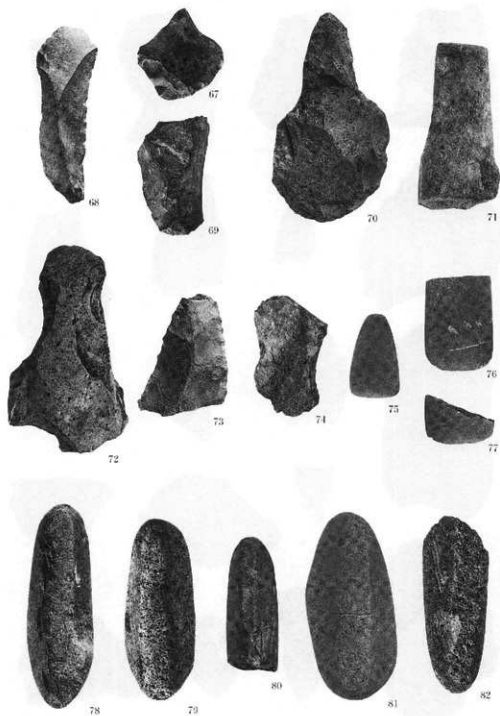
写真図版11 石器(1)



写真图版12 石器(2)



写真图版13 石器 3



写真図版14 石器(4)



83



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95

写真図版15 石器(5)



96



97



99



98



100



101



102



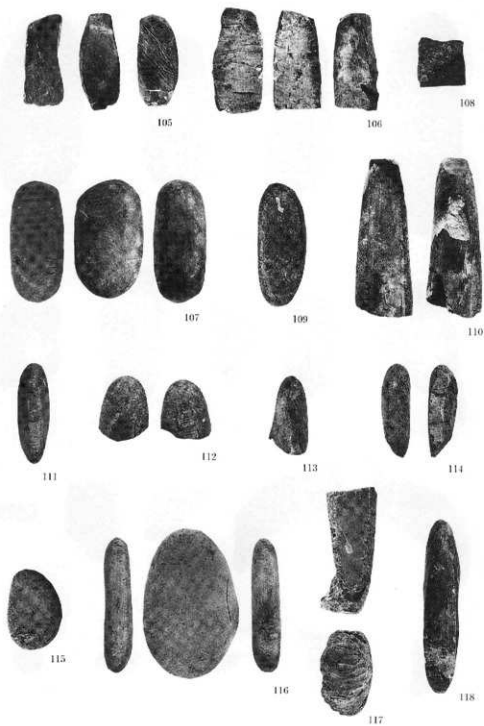
103



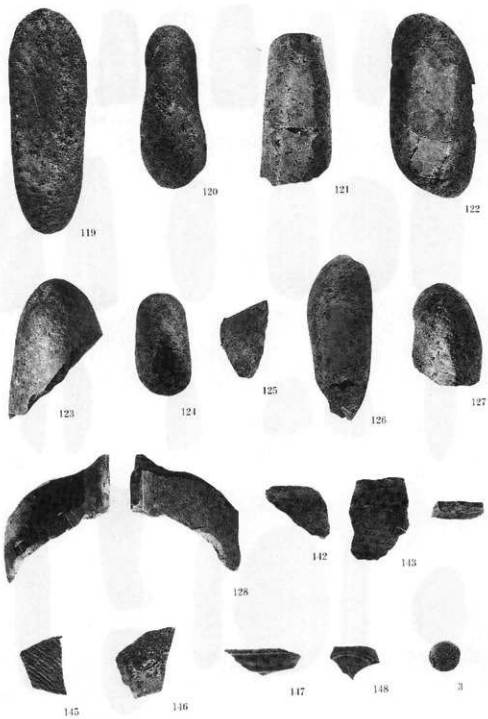
104

写真図版16 石器(6)・石製品





写真図版17 砥石(1)



写真図版18 砥石(2)・石製品・土師器・須恵器・陶器・金属製品

# 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 小笠原 喜一  
副所長 米澤 康雄

## 〔管理課〕

管理課長(兼) 米澤 康雄  
課長補佐 森岡 陽一  
主事 阿部 隆広

## 〔調査課〕

調査課長 昆野 靖  
課長補佐 佐々木 嘉直  
主任文化財 小田野 哲憲  
専門調査員 三浦 謙一  
◇ 工藤 利幸  
◇ 高橋 与右衛門  
◇ 平井 進  
◇ 中川 良一  
◇ 中川 重敏  
◇ 藤村 義介  
◇ 高瀬 實隆  
文 化 財 千 葉 孝 雄  
專 門 調 査 員 齋 藤 博 司  
◇ 東海林 幹  
◇ 佐々木 弘均  
◇ 川村 貞行  
◇ 鈴木 東 格  
◇ 伊藤 藤 邦修  
◇ 齋藤 邦雄  
◇ 神 敏 明

嘱託 吉田 一男  
兼 技師 山館 昇  
運 転 佐藤 春男  
技 能 員

## 文 化 財 專 門 調 査 員

◇ 佐々木 信一  
◇ 小原 眞一  
◇ 村上 修  
◇ 酒井 宗孝  
◇ 松本 建昭  
◇ 金子 彦宏  
◇ 演習 常久  
期 限 充 實 相 伸 靖  
專 門 調 査 員 及 阿 川 部 勝  
◇ 菊池 明  
◇ 及川 雅  
◇ 星 下 之  
◇ 森 鈴 木 宏  
◇ 菊 野 知  
◇ 藤 千 地 幸  
大 久 保 裕  
熊 谷 博 隆  
博 茂 由

## 〔資料課〕

資料課長 高橋 薫  
主任文化財 田 鎖 壽夫  
専門調査員

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第148集

## 岩崎城西遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 平成2年6月25日

発行 平成2年6月30日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020岩手県紫波郡磐南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 ㈱ 吉山印刷

〒020岩手県盛岡市各須川町23-27

電話 (0196) 25-2323

---

© 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1990